
満洲の記憶

第4号

追憶——満洲点描—— 執筆：西田純明 編集：尹国花

戦後延吉での生活——終戦から引揚げまで——
..... 執筆：猪伏昌三 編集：佐藤量

ある軍人婦人の引揚げ体験 執筆：山村幸 整理：山田千里
解題・編集：大野絢也、佐藤仁史

『間島中学校同窓会報』記事目録 尹国花

延辺朝鮮族自治州調査記——延吉と龍井を中心に——
..... 佐藤量、湯川真樹江、菅野智博、尹国花

寄贈資料目録 / 2016年度研究会活動記録 / おしらせ

「満洲の記憶」研究会

2017年10月

追憶

——満洲点描——

執筆：西田純明

編集：尹国花

「満洲」、この言葉を聞いただけで、一瞬にして私の脳裏に現中国東北部にひろがる雄大な大平原の光景がうかんでくる。

記憶としては4-5才頃だったか、中国人街の中に我が家はあった。お隣は白系ロシア人とよばれていた家族が住んでいた。後で聞いたところ「あの人達は元貴族か、ブルジョア階級で、革命が起きてからこの地に逃げてきたのさ」と教えられた。その家で動物をいろいろ飼っていたが、なかでも背の高い七面鳥の一番威張っていた親分に追いかけられ、必死に逃げ回ったことが何度もあった。クリスマスにお隣に招待され、カチカチにかしこまってあまり楽しくなかった記憶がある。その後、例の親分の姿を見かけなくなった。不思議に思い、母に「あの鳥どうしたんだろうね」と尋ねたら、こともなげに「クリスマスの時料理されちゃったの」と教えられ、びっくり仰天した。そういえば大きな鳥肉の丸焼きがテーブルの上に乗っていたのを思い出し、なんともいえない複雑な気持ちになったものだ。

近くに中国人の靴を作っている店があった。3-4人の職人さんが口に太い糸を啣えて忙しく働く姿を終日飽きもせず眺めていたのが日課だったのだが、今考えると邪魔な小僧をよく追い払わなかったものだと思う。ある日、昼食の時間になり、早々に帰ろうとして、食事の様子をチラと見ると、片手でまんとう(肉まんに具がなにもはっていないやつ)を食べ、もう片方にネギ1本をもってバリバリかじっている。その簡素な食事をみて、貧しさよりも活気あふれるバイタリティみたいなものを感じたものだ。あの皮のにおいに満ちた作業場はいまだに懐かしく思われる。

また、通りの向いにロシア人の太ったお婆さんのいる店があり、よく使いに出された。店の棚には大きな瓶が並び、様々なピクルスがあった。なかでも大き目のきゅうりの漬物は美味しく、あの甘酸っぱい味は忘れ難いものの1つだ。

住んでいたこの町はハイラルと言い、ソ連邦の国境に近く、一度馬車で郊外を

走った時、遠くに日本軍の兵舎があり、歩哨が銃を構え立っているのがみえた。1939年、関東軍がソ連軍と衝突したノモンハン事件があり、この兵営からも出撃し痛手を被って帰還してきたのを覚えている。

1940年、ようやく学齢に達し、在満日本人小学校に入学。1年生となる。父の転勤により、ソ満国境の満洲里に移る。その年12月、太平洋戦争勃発。しかし、日常生活はさして変わらず、首にスケート靴をぶら下げ、学校に通っていた。

秋のころには、途中でロシア人の修道院があり、尼さんたちが真っ黒なガウンを着てベンチに腰かけ、黄色の銀杏の葉の舞い降りるなかで、にこやかに談笑している姿を眺め、その色合いのコントラストの鮮やかさとゆったりとした空間が何故か私の記憶に深く残っている。

その後、しばらく東京に戻り、1945年2月、満洲吉林省延吉に移る。同年8月敗戦。ソ連軍が進駐してきた。10月、父が捕虜収容所に入れられた後、やむを得ず稼ぎにでる。市場で「大福」を仕入れ、木箱に並べ首にかけ、街中を売り歩く。外出している日本人は少なく、金もあまりない。買ってくれるのは中国と朝鮮の人だけだ。

ある日、最後に残った「大福」2個がなかなか売れない。一日の利益がその2個に集中しているというのに、腹はへるし、そのうち、えいくそ、とばかり口の中へいられてしまった。すると、どこかでみていた

らしい朝鮮の中学生があらわれ、「駄目じゃないか、売り物を自分で食べるやつがあるか」とお説教されてしまった。そのあと、とぼとぼ家路につきながら、なぜか嬉しさがこみあげてきた。敗戦国のこどもが少しでも家計の足しにと物売り姿をみて哀れに思い、気合をいれてくれたのだと思うと気持ちが明るくなり、忘れられない思い出となった。

60才を過ぎ、中国各地を観光するようになった。そのうち、実弟が自分の生まれた所にぜひ行ってみたいと言う。それはハイラルだ。しかし、その前にまず親父が無念の死を遂げたかの延吉に墓参に（墓はないのだが）行くのが順序だろうとなり、現在まで延吉5回、ハイラル、満洲里各2回たずねた。全部弟夫婦との両カップルで旅したのだが、50年強の歳月の隔たりは大きく、中国は予想以上に変容していた。延吉でホテルの支配人が日本に留学していたと聞き、通訳をお願いして昔住んでいた所とか学校、収容所など尋ねまわったが、知る人は皆無だった。終戦時20才としても、現在は70-80になる。平均寿命が日本より短いとなれば、昔のことを知る人は少なくて当然となる。

延吉市内は、以前平屋が大半だったが、今では堂々たるビルが林立し、馬糞まじりの砂ほこりにまみれた道路が完全舗装されている。今浦島になり果てた私は、案内役の役目を全うすることは出来なかった。

戦後、市内でおばあさんが1人でやっ

ていた冷麺屋に行ったことがある。シーソーみたいな装置で、足で踏むと杵が麺の固まりをたたき仕組みだ。大変美味で、忘れられない思いを抱いていたら、なんと冷麺専門の大きな店が出来ていて、客も大勢で、にぎわっていた。毎回市を尋ねるとその店に駆けつける。

河川敷で開催されている朝市にも、よく行った。餅も臼でつきながら売っていたし、高級品扱いされているような犬の肉もならんでいた。衣料品の店舗もごった返していた。

ハイラルでは、ガイドを頼み観光をしたが、一度間違えて中国人の行くべき場所に案内された。そこは日本軍の古いトーチカがあり、周辺には地下壕がはりめぐらされ、壁には白いペンキで大きく「忘れることなかれ」とあり、日帝の暴虐を指弾する言葉が書かれていた。軍国主義日本の罪は重く、隣国同士、和解にいたるのは長期間必要だと反省をこめ痛感した次第である。

次の訪問地、満洲里に着いてその発展ぶりに驚嘆した。ロシアとの交易が盛んで、人と物資の一大集散地と化していた。高層ビルが立ち並び、立派なホテルも多い。ロシア語で書かれた看板の店も多く、街中ロシア人が家族連れで歩いていた。この地も例外なく、昔の面影は皆無だった。あの懐かしい修道院もなかった。郊外にでると、丘陵地帯に風力発電の風車が無数に立っていた。この辺境の地にも新

生中国発展の勢いは加速している。

北京経由で帰国するため空港に行く。折しも日没前で、西の地平線に大きな太陽が真っ赤に輝いていた。振り返ると己の影がどこまでも長く伸びていた。日本ではあまり見られない風景を見、満足して機に搭乗したことを思い出す。

幼い頃、僅か4-5年ほどしかいなかった満洲も、様々な民族が暮らしていたのだが、しかし人間の根幹としてはなんら大差ないというのが実感である。大興安嶺の奥地に暫くいたことがあったが、冬はマイナス30から40度という厳寒の地で川は結氷する。遅い春が訪れると、氷が大きな音を立てて割れ、一気に下っていく。住民は皆興奮して川に向かって走り、じっと流れをみつめるのだ。

歴史を振り返れば、隣国中国があらゆる面で先進国であった時代は長く、文化、宗教、思想、その他漢字も輸入してしまった。その恩恵を受けた日本は明治維新後、近代化が急速に進み、天狗になって富国強兵を目論み、近隣諸国のみならず自国民にも大きな犠牲を強いる結果を招いた。この過去の歴史を猛省し、平和な日本を目指すべきだ。

川の流れは止まらず、季節がめぐれば氷も割れる。中国と日本もいずれ暖かい春風が吹き、共に繁栄していくことを願いながら、今後も交流を続けていきたい。



中国東北部の地図 (作成者：大野絢也)

戦後延吉での生活

——終戦から引揚げまで——

執筆：猪伏昌三

編集：佐藤量

1929年3月10日、小生は猪伏家の三男として朝鮮半島の元山で生まれた。祖父の代から元山駅前で造り酒屋を営んでおり、「南海」と「長徳」の銘酒を醸造し、蜂印のポートワインも製造した。杜氏は新潟県から雇い、米は現地で調達し、酒樽には日本から取り寄せた吉野杉を使っていた。

満洲事変以降、事業拡大のために満洲の凶們に居を構え、1935年4月に凶們小学校に入学した。しかし、1938年に酒造工場が火事に見舞われたことから、父親は満鉄関連の運送業社に転職し、一家で延吉に転居した。その後延吉小学校に転校し、1942年に延吉中学校（のちに間島中学校）の1期生として進学した。終戦をむかえたのは4年生のことである。

敗戦直後の延吉

1945年8月15日正午、陛下の終戦の放送が流れると直後の延吉市内の空気は一変した。日本人が単独で行動すること

は危険になった。翌日の午後、「日本人は全員604部隊に避難せよ」との緊急の連絡が隣組からあり、戸締まりもほどほどに、身の回りの物を持てるだけ持って部隊の広場に集まった。病人、老人、赤子、それに、周辺地に入植していた開拓団の人たちもいた。何十キロも離れた所から飲まず食わずで避難して来たのであろう。みな生気がなく、目もうつろで、何かに怯えながら戦々恐々としている様子だった。

3日後に帰宅したが、住宅を追い出されて、少々の家財を売ったお金だけでは家族8人の生活は不可能であり、何かをしなければ食べていけなかった。その頃、日本軍の捕虜が東満の各地から連日貨車で延吉駅へ運び込まれては、そのあと徒歩で隊伍を組み、そのまま延吉捕虜収容所へ連行されていった。何日もかかって38度線以北の朝鮮半島から連行されてきた兵隊もいた。地域も色々であったと思うが、みな疲弊し、どうにか歩いているような兵隊もいた。戦争末期で高齢の臨時招

集兵が多く、若い者は既に南方戦線へ飛ばされており、元気な者は少ないように見受けられた。

小生はまだ若くて小柄で小回りが利き、また同じ日本人同士ということで意が通ずるので、ソ連兵の目を掠めては隊伍の中へ入り込み、牛革のバンド、純毛の靴下、飯盒、雑嚢、軍靴など、何でも片っ端から買わせてもらった。護送が始まる前に倉庫から新品の服装で身の回りを固め、所持品もそれなりに持ち出した抜け目のない捕虜もあり、「僕、早く高く買ってくれんかい」と催促されたりもした。捕虜の輸送は連日続いた。シベリヤに送られた捕虜はこの延吉ルートがかなりの数にのぼったと思う。

そういう間にも、寒さは日一日と加わり、10月になると零度以下の日もあった。そんな中、それまでの住居を追われた在住者も、敗戦と共に避難してきた者たちも、タバコ巻きを始めたり、おにぎりや赤飯などを作って売ったり、とにかく生きていくため、飢えをしのぐためなら何でもやるという切羽詰まった状況であった。小さい子供から年配者までが行商のために街中へ出た。

燃料確保と高粱飯

越冬のためには燃料確保が必要だった。例年は石炭を馬車で買ってきて冬の準備をしたものだが、転居先にはオンドルもペーチカもストーブもなく、かといって火鉢や炬燵では大陸の冬を乗り越える暖

は取れなかった。そこで目を付けたのが、夏場、ソ連の戦車部隊が数週間駐屯していたフルハト河の南側河川敷に繁茂する背の高い雑草だった。それは燃料として実に手頃だった。

小生は弟と二人で1日に2、3回、ドンゴロス<编者注:麻袋のこと>を携え、できるだけ背丈が長く太いのを刈り取り、パンパンに詰め込んでは荒縄で背負って帰った。西からの空っ風が強い時などは、南北に架かる延吉橋の上で、重くて大きなドンゴロスが押されて左から右へよろけたが、根性で踏ん張った。それでも前庭に積み上げていく雑草の嵩が毎日増えるのが楽しみで、それがかなりの高さになった時、「やれやれひと安心」と胸をなでおろしたものである。

米の飯は敗戦と共にほとんど口にすることはなくなり、代わって高粱飯が主食になった。これは普通に炊くと硬くて消化に悪いので、飯盒でお粥に近い柔らかさまで炊かねばならなかったが、コツが要った。まず水に一晩浸けておき、朝に一度炊く。これには枯れ草が役立ち、すぐに沸騰した。それを杵のようなもので搗き、赤い渋皮が分離したら、一度水洗いして渋味を取り、そのあと大豆油を少量と塩を入れて炊き直す。すると、見事に美味しい高粱のご飯ができあがるのだ。引揚げまでの毎日、この高粱飯で命を永らえることができたが、引揚げの際にも、「日本では食料がない」と言われ、重いのに一斗近く持って帰ることになった。

満蒙開拓青少年義勇軍の少年を預かる

ところで、10月から始めた行商で延吉刑務所へよく行ったが、そこには満蒙開拓青少年義勇軍の隊員が駐屯していた。彼らは食糧増産のため、また国家の銃後を守るため、満洲に新天地を求めて全国から志願し、故郷を離れてきた16～19歳の意気軒昂な青少年であった。しかし突如としてソ連の進攻が始まり、指揮系統は乱れ、ただ日本への帰国をめざして避難してきたのである。昼夜を分かたず歩き続ける中で、近隣の開拓団に配属されていた隊も加わって人数は膨れ上がり、全く情報の分からない者同士が無い知恵を絞り、「邦人も多く、帰国するにも最短距離」ということで延吉市を目指し、300～400キロもの道なき道を南下したのであった。

そうしてやっと目的の延吉市に辿り着いたのだが、そこは希望を持てるような町ではなく、惨めな日本人の溜まり場でしかなかった。居留民に力を貸してもらって何とか居場所を確保し、学校の教室や工場の片隅にも分散したが、大半は延吉刑務所の作業場に起居するようになった。

やがて、そうした窮状を見兼ねて居留民の世話役が、隊員たちを邦人の家庭に預かるよう手配した。受け入れられる家族はそう多くはなかったが、同胞として1人でも多くを助けてあげようと皆が協力した。我が家にも2人が来た。1人は石川県出身の吠木英世君といい、もう1人は

長野県出身で鈴木と名乗った。見るからに哀れな姿で、母も最初、どうすべきか躊躇していた。とりあえず着ている物を全部脱がせ、乏しい中から着替えを与え、洗濯から始めた。食うや食わずの中で扶養家族が2人増えたので、正直大変だった。12月に入って寒さは一段と増してきた。室内の汲み置き飲み水も零度以下になり、凍結すると甕では割れるため樽に保管していたが、朝には酌が凍りついて、すくえない日が何日もあった。寝る時は昼間の服の上に外套を着て、防寒帽をかぶり、靴下も二枚重ねの間にトウガラシを入れて履き、毛布をかぶった。底冷えがひどい寒波の際には亡くなる人が特に多く、中でも5歳以下の子供は見かけなくなるぐらい、次から次へと亡くなっていった。

父の死

12月下旬、さらに強烈な寒波に見舞われた。大陸の雪は湿り気が少なく、横殴りに降っては舞い上がり、様々な波形や稜線を描きつつ積もっていく。底まで凍結した川には牛車が乗り入れて天然氷の製造が始まり、夏のかき氷の原料として、その切り出しが盛んに行なわれていた。

そんな中、小生も連日熱にうなされていたが、ある日、夜もかなり深まった頃、隣に寝ていた父が急に声をかけた。「おい昌三、もう駄目かも知らん。情けない。猪伏家を継ぐのはお前しかおらん。ここまで来て戦争に負けて、敗者の姿で日本に帰るなんて堪えられるものではない。も

うじき石灰石の山の採掘権の許可が下りる段になって、こうなるとは余りにも残念だ、昌三、わしの無念を晴らしてくれんか」。こちらも聞き逃すまいと必死だった。母も枕元で聴いていたが、妹らは高熱で寝たままなので、この父の最期の言葉を聴くことはできなかった。その夜は氷点下 30 度を越すこの冬一番の冷え込みで、延吉全体でも亡くなった人が突出して多かったそうである。寒冷前線が延吉の夜空をまるで通り魔の如く駆け抜けたように思われた。

豆腐売り

父亡きあと、どうやって生き抜くか、一世一代の戦いが始まった。中国人街の北の方に、ロバに臼を引かせて造る豆腐製造所があったが、まずはそれを仕入れて売ることにした。現金収入のある手取り早い商売だ。さっそく、軍隊の乾パンを保存するブリキの細長い空き缶を手に入れ、外側を断熱のために板で囲い、蓋を付け、それを担いで夜明け前の暗い道を製造所へ向かった。

30 丁ほど受け取ってお金を払い、外に出ると、さすがに寒さを感じた。肩に担いだケースから湯気が立ちのぼる。歩くとケースの中の豆腐が湯と共に揺れるため、腰をふらつかせながらバランスをとる。

「豆花」と大きい声で売り歩くと 1 軒の戸が開いて「小輩 来来」と声をかけてくれた時は、泣きたいほど嬉しかった。

鉄工所と風呂屋

そうこうしているうちに「鉄工所で働いてはどうか」との紹介があった。経営者は金という朝鮮の人で、日本の工業学校を出たエンジニアだった。ソ連軍の自動車の修理から旋盤、溶接、鍛冶など、鉄工万般に亘る幅広い仕事をしており、さっそく勤めることになった。いきなり大ハンマーで真っ赤に焼いた鉄を叩く作業を始めたが、へっぴり腰の動作が危なっかしく、「この仕事はお前には向かん」と言われて溶接に回された。剣道で鍛えた腕っぷしには自信があったが、竹刀と鉄の塊とではまるきり感触が違っていたし、第一、飯も腹一杯食べていないのに力が出る訳もなかった。

回されたのは電気溶接機を製作する部署だった。どこから外してきたのか、電信柱の上に取り付けてあった変圧器をそこで解体し、中のコイルを取り出し、絶縁した太く平たい銅線の上に巻きつけたりして完成させていた。頭の良い人もいるものだと感心した。溶接そのものも一から教えてもらった。ガスと電気の二つがあり、電気溶接は、溶接棒をプラスのはさみでつまみ、二枚の金属の隙間に近付けて火花を発生させながら溶かしていくと、綺麗に接着している。便利な道具があるものだと、これにも感心した。

そのうち、ソ連軍のトラックの荷台に亀裂ができたとかで、大きな修理の仕事が入ったことがあった。こちらは未熟なので、その作業にはなかなか加えてもら

えなかったが、一度やらせてもらった時、「そんな鼻くそみたいなやり方では鉄どうし接着しないのだ」と叱られたのを思い出す。

そうして溶接と共に、雑用や掃除、使い走りなどに追い回されている時、金社長から「うちが経営している風呂屋の仕事をやってくれないか」と話を持ちかけられ、さっそく手伝いをするようになった。風呂屋は朝鮮市場の入り口の前にあって場所が良く、客も多かった。日本人もちよいちよい来ていたと思うが、裏方の仕事なので、知り合いの日本人にはほとんど会うことはなかった。

湯は、それまで石炭で沸かしていた釜は使わずに、ニクロム線をコイル状に巻いて電熱機を製作し、それをボイラータンクに入れてスイッチを入れれば簡単に沸いてくれた。温度計で湯温を測り、水が減ればヒューガルポンプ<編者注：井戸水を吸い上げるモーターポンプ>を回して水を補給し、客が増えて湯が減ればその分だけ給湯し、常に正常な湯量と湯温を維持すればよかった。合理的な発想と仕組みに驚いた。その上、小生は四畳半のオンドル部屋に泊まり込み。いい仕事に巡り合えたと感謝した。

ブリキ屋

気候がさらに暖かくなった頃、風呂屋の向かいの中国人が経営するブリキ屋に転職することになった。主人は日本語が上手だった。仕事は独特の手作業で、やか

んや洗面器などブリキ製品全般を製作し、穴の開いたアルミ鍋などの修理も手がけた。小生の仕事は、亜鉛メッキを施した屋根用の波トタンを延ばし、それが何枚もたまると、今度は原寸の型紙に沿って線を引き、ハサミで切っていくというものであった。

昼にはお金をもらって向かいの冷麺屋へ昼食を食べに行くのが常だったが、その冷麺の旨さは絶品であった。目の前の大釜では牛の頭をゆで、隣の釜では、沸騰している湯の中へ、練って筒に入れたでんぷんを長い梃子でトコロテンを突き出すように落とし込む。さっとゆがいて氷で冷やし、キムチなどいろいろな具を放り込んでいた。特に雉の肉の旨さは格別で、今も思い出すとたまらない。もう一度食べたい思いに駆られるが、今は雉の肉は使われてないのが残念だ。

それはともかく、ブリキバサミを朝から夕方まで使っていると、握力が鈍ってくる。「ハサミと頭は使いよう」といい、これにもコツの会得が必要であったが、小生は慣れないため、薬指と中指に力がかかって水ぶくれの豆ができ、それが破れて仕事ができなくなってしまった。「早く治して主人に負担をかけないようにしよう」と焦っていたところ、幸い近所に元軍医だという日本人の除隊者がいて、治療を受けることができた。化膿しかけた傷口を消毒し、リバノールという黄色い消毒ガーゼをあてがい、包帯をしてもらって何とか仕事に戻ることができた。ち

なみに、この傷は 1946 年 8 月 16 日に引揚げるまで治らず、首から紐で右手を吊った姿で日本へ帰ることとなった。

引揚げ

1946 年 6 月あたりから、アメリカの仲裁で日本人の引揚げ問題が持ち上がり、話は進展していったようだ。7 月になると、巷では「内地に帰れるのではないか」との観測が流れはじめ、「長かった夢が叶えられる」「よくぞ今まで生きてきたものだ」と安堵に胸をなで下ろす人たちが増えてきた。病人を抱えて毎日が悪戦苦闘の人たちや、「お金もないのに内地へ帰ってどうするのだ」と不安にかられる人たちもいたが、それでも異国でのこの苦しみから間もなく逃れられるという希望に、誰もが日々胸を膨らませていった。

いよいよ引揚げがはじまるとのニュースが現実味を帯びはじめ、皆の気持ちは「日本に帰れる！」と希望で明るさを増していった。そんな頃、鉄工所や風呂屋で働いていた時の金社長から「いよいよ日本に帰れるようになるよ。はっきり日程が決まったら送別の宴を用意するので連絡するように」との伝言があった。そして 7 月の末、「出発は 8 月 16 日」との報が入り、小生の送別会が開かれることになった。

公園橋を渡ってしばらく行くと左側に大きい池があった。北側の斜面には 604 部隊の兵舎があり、もう少し先には日本人墓地がある。そこまでは行かなかった

が、池を越えてしばらく歩き、左に曲がった所にある一戸建ての閑静な屋敷が金社長の邸宅であり、この日の宴会場であった。そこで数人の人たちと一緒にご馳走にあずかったのだ。猫足の会席膳が 1 人ずつに用意され、サバリ<編者注:真鍮製の大きいお椀>や皿など初めて見る高価な食器類に、冷麺、なかじょく、漬物、酔の物など朝鮮料理の最高級メニューが盛られた。味噌汁にはトウガラシの真っ赤な粉が浮いていたので、息をかけて向こう側へ寄せ、その間に急いで啜ると口の中が火事のようになった。その時ほどコップの水の旨さを感じたことはなかった。

出発の指示が居留民団からあり、引揚げの機運は一気に盛り上がった。持帰る荷物は、先祖の位牌 43 枚に過去帖、寺田校長手書きの卒業証書に学籍簿、炊飯道具に着替え、それに金社長に言われた高粱やブリキ屋の奥さんから頂いたポーミーパン<編者注:トウモロコシのパン>などなど。そうした持てる物一切を風呂敷に包み、鞆やリュックにも入れて、皆で振り分けた。そして近所の人たちに送られ、当日正午、延吉駅前の広場に集まった。

集合した人は千人を超えていたように記憶している。小生ら第一陣は 40 数両の無蓋貨車へグループごとに乗り込んだ。列車はまず吉林市を目指して西へ走った。しかし、数駅通過すると長時間停車するといった具合で、随分と時間がかかった。翌朝 8 時頃、私たちは徒歩で吉林市に向けて歩き始めた。隊列を組み、八路軍の兵

士が5、6人付き添った。やがて山岳地帯の登山道に差し掛かると、「停止」の命令が出された。そこは八路軍の支配地域と国民政府軍の支配地域の境界で、鉄条網の手前に八路軍、向こう側に国府軍の監視兵が数人ずつ立ち会い、引揚げ者を1人ずつ引き渡す作業が行なわれた。

そこから更に登り坂を辿り、小姑家駅を経て老爺嶺駅に着いたのは午後3時頃だった。拉法駅から20キロほどの道のりだった。駅に近づいた時、国府軍兵士が拡声器を使い、「日本人引揚げ者の皆さん、お疲れ様でした。ここが老爺嶺駅です。ここから列車が出ますので、指示に従ってご乗車下さい」と流暢な日本語で呼びかけてくれたのが印象に残っている。

吉林市内では野宿で2泊。そこで3度無蓋貨車に乗り込み、一路、遙か南西に位置する錦州を目指した。途中、「満洲国」の首都だった新京を通過。見渡す限りの南満洲平原を走り抜けて四平へ。さらに南へ下って満州事変発端の地・奉天で1泊し、大陸最後の逗留地となる錦州に到着。20日程の乗船待ちとなった。葫蘆島は錦州からさらに南へ64キロもあり、この間は四度無蓋貨車に揺られた。港には日本の客船・貨物船やアメリカのリバティ号などいろいろな船が待ち受けてくれていた。船は渤海湾、黄海を抜け、3日目

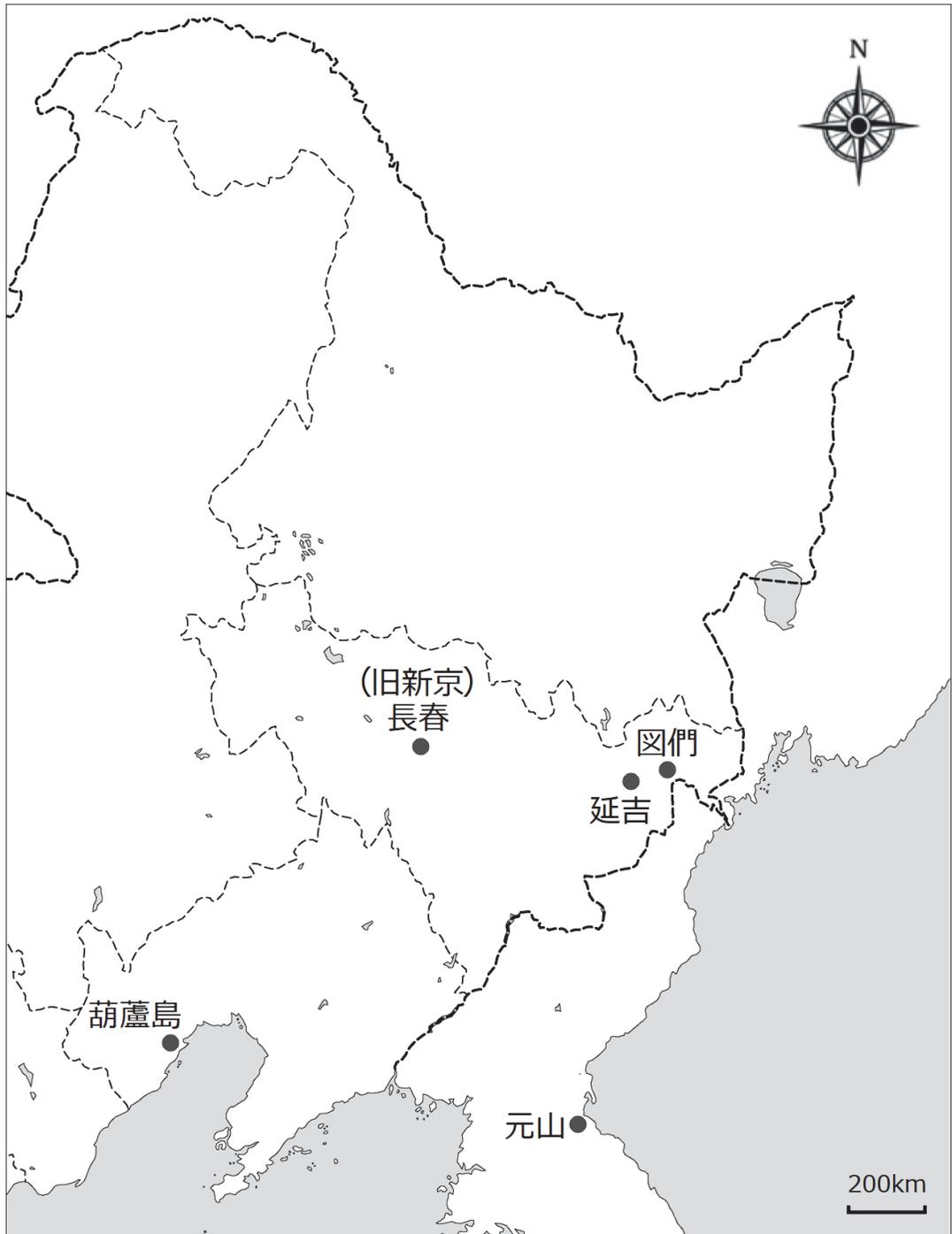
には対馬海峡から玄界灘に入った。10月10日博多港にて上陸、故国日本の大地を踏みしめた。

まとめにかえて

あれからほぼ70年。延吉市は中国吉林省延辺朝鮮族自治州の州都として、いわゆる「改革開放」の波に乗り、当時10万人ほどだった人口が、今や50万を超える大都市となった。そして、「満洲国」時代に建てられた建造物のほとんどは、壊されるか都市型に改築されて、街並みに昔日の面影は見られず、あの捕虜収容所の墓地も、私の父の遺体を埋めた日本人墓地もすべては跡形もなく、地下で永遠の眠りにについているかのようだ。

思えば、彼の地で望郷の思いに駆られつつ亡くなった夥しい同胞の遺骨は、引揚げ後はただの一体も持ち帰ることはできなかったが、その地がすさまじい勢いで変化していく様子を今、彼らはどのように見ていることだろう。

最後に、日本、朝鮮半島、中国、それぞれの国の民衆がかつて流した痛恨・悲惨の涙を再び見ないことを願いつつ、3つの地域にまたがって少年期を過ごした数奇な縁を懸け橋に、残る人生を東アジアの恒久平和のために注いで参りたいと念じております。



中国東北部の地図 (作成者：大野絢也)

ある軍人婦人の引揚げ体験

執筆：山村幸　　整理：山田千里
解題・編集：大野絢也、佐藤仁史

解題

本稿は、「満洲国」及び関東州において教育を受け、大連における教員生活を経た後、関東軍所属の軍人に嫁いだ一婦人である故山村幸氏が、ソ連と満洲国の国境地帯であった黒河近郊の山神府における敗戦やその後の引揚げの経験について記した三点の資料からなる。それらは、「昭和23年の手記」と題した書簡、「終戦の日から」と題した書簡、「悲しみは消えない」と題する手記の3点である。以下では、山村幸氏の経歴を踏まえたうえで、本手記の作成経緯について説明する。

1 資料と出会った経緯

本稿で収録される三点の文字資料や途中で挿入する写真などとの出会う契機となったのは佐藤が一橋大学において2015年度に担当した社会史史料講読Ⅱという授業においてである。当該授業では、「満洲」からの引揚者が有した記憶の特質や変遷を理解するために、岡山ハルビン会

が発行した『わが心のハルビン』（1977年3月～1995年11月）の記事目録を作成し、主要記事の読解を行った。その成果は、佐藤仁史ほか編「岡山ハルビン会会報『わが心のハルビン』記事目録」として本誌第3号（2016年10月発行）に収録されているので、参照されたい。

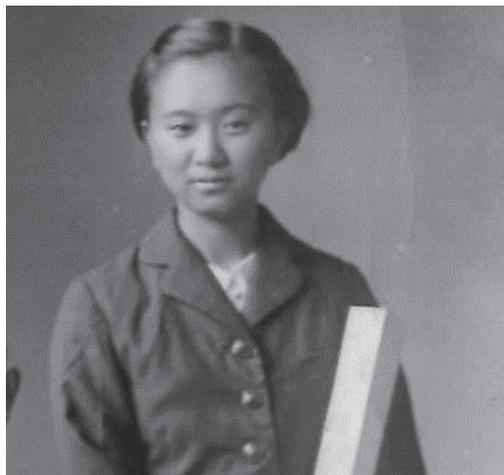
授業のなかで、12名の受講生のうち3名の親族に「満洲」をはじめとする「外地」からの引揚者がいることを受講生から知らされた。彼らのうち、社会学部2年の佐藤珠貴さんからは親族の引揚げに関する情報の提供、および山村幸氏のご令嬢である山田千里氏との面会の手配をいただいた。そして2016年2月11日に一橋大学の佐藤研究室において山田千里氏と面会し、資料の確認・調査を行った。その後、山田千里氏からは山村幸氏関連史料の提供と、本誌における公開を快諾いただいた。ここに記して謝意を示したい。

2 山村幸氏の経歴

山村幸氏は、1922年5月に茨城県真壁町で生まれ、1923年に大連へ両親とともに渡った。父親である上野義氏は満鉄職員であったため、転勤により小学校から高等女学校までの一時期安東にも居住していた。その後は大連に戻り、1939年に大連神明高等女学校を卒業後、奈良女子高等師範学校に入学した。1943年に同校を卒業し、再び渡満して大連芙蓉高等女学校へ教諭として赴任した。1945年6月に遼陽関東軍第1幹部教育隊へ所属していた予備役陸軍少尉の山村義房氏と見合い結婚し、教諭を退官した。その直後の7月初旬に、夫の転属のため新任地である満洲国黒河省山神府へ転居した。



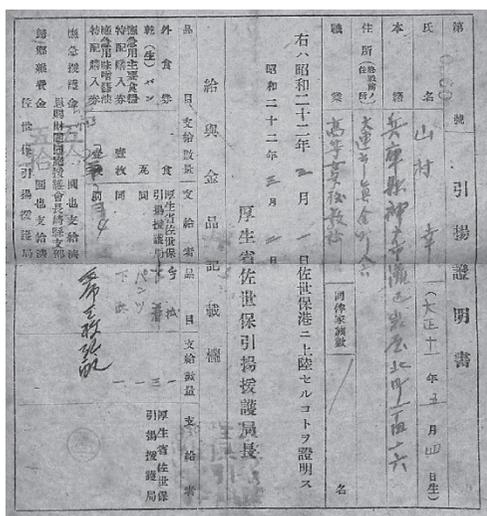
山村義房氏
(撮影時期、場所は不明)



高等師範学校卒業時の山村幸氏
(1943年、神戸にて撮影)



山村義房・幸夫妻の婚姻写真
(1945年、大連にて撮影)



山村幸氏の引揚証明書



愛知県立第2高等女学校での記念写真

引揚げ後の山村一家
(1952年、名古屋にて撮影)

1945年8月9日、ソ連の対日参戦によって山村幸氏は山神府に居住していた人達とともに引揚げることとなった。山村義房氏は、妻に事態を告げるとすぐに部隊に帰還した。その後捕虜となり、9月にはソ連へ移送されてシベリアに抑留された。一方、山村幸氏は、乗車していた列車が北安で停止し、そこで敗戦の日を迎えた。8月20日もしくは21日に武装解除となり、避難民として徒歩で長春まで移動した。満鉄本社に勤めていた叔父などを頼りながら、同年12月に実家のある大連へ到着した。そして、1947年2月に大連からの引揚船によって佐世保に入港し、山村義房氏の実家があった愛知県春日井市へ引揚げた。

山村幸氏は引揚げ後、1947年8月に愛知県立第2高等女学校へ勤務した。12月に山村義房氏がシベリア抑留から復員したことに伴い、1948年3月に退職している。その後も引き続き愛知県に居住した。2015年8月14日に山村幸氏が逝去されたことに伴い、本手記を含む遺品は山田千里氏ら遺族によって保管されることとなった。

3 資料の内容紹介

本稿に収録された資料1「昭和23年の書簡」、資料2「終戦の日から」、資料3「悲しみは消えない」は、それぞれ作成された時期は背景が異なっている。以下、その内容について概要を紹介する。

資料1「昭和23年の書簡」は、引揚げ

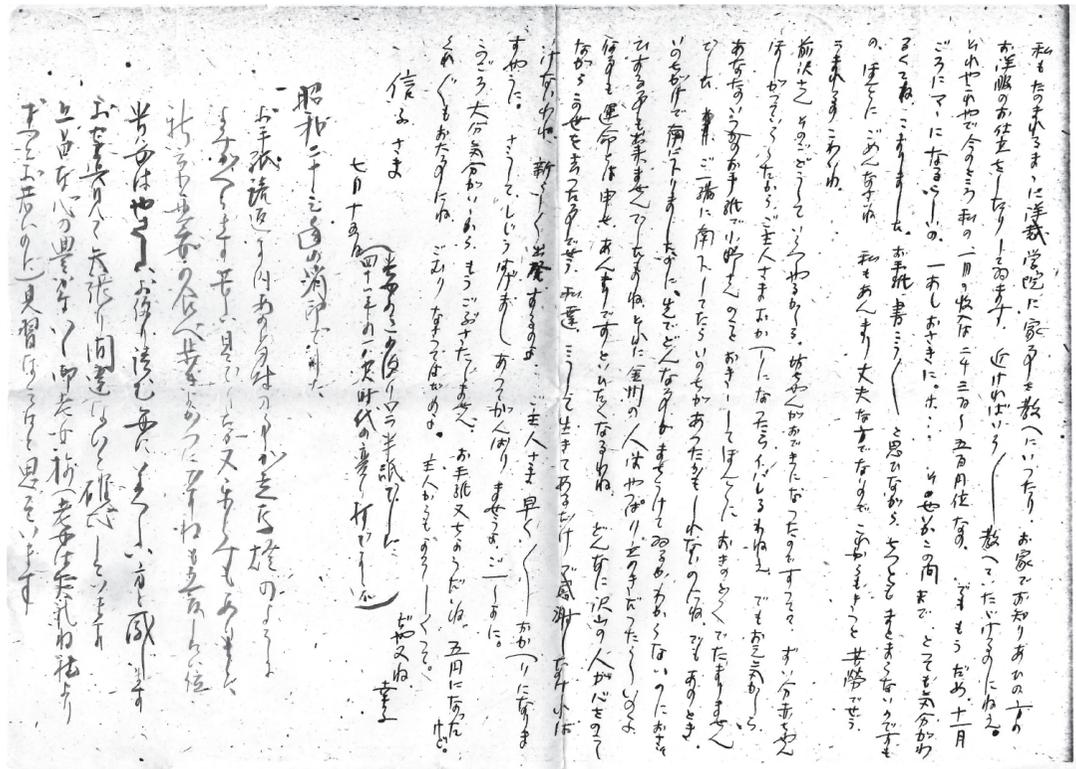
直後の1948年7月に山村幸氏から梶信子氏へ宛てて書かれた書簡の写しである。梶信子氏は山村幸氏と同じく、見合い結婚によって軍人の妻となり山神府に移住した。そして、夫が捕虜となった状況で山村幸氏と山神府からの引揚げ経験をともしていたため、女性同士の信頼関係があったと考えられる。書簡には内容に対する梶信子氏のメモも記されている。

資料2「終戦の日から」は、引揚げから約50年経過した2001年8月19日に書かれた、子息・尊房氏あての書簡である。内容は、山村幸氏が引揚げ時にお世話になったという人物の消息をたずねる書簡の

なかで、山神府からの引揚げ経験を詳細に回想したものである。

資料3「悲しみは消えない」は、山村幸氏が91歳となった2012年に記した回想文である。内容は「終戦の日から」と同じく山神府からの引揚げ経験を中心としているが、2001年と比較して記述内容が整理されている。

これらは異なる時期に回想されたものであり、語りかける相手も異なっていることが、山村幸氏の引揚げ経験の語られ方にどのような影響を与えているのかは極めて興味深い点である。



資料1 「昭和23年の書簡」の一部

凡例

- ・旧字体や異体字、略字、旧かな使いなどは、本資料としての性質を考え原文のまま掲載した。
- ・誤字と思われる箇所はそのまま掲載した。
- ・句読点、空白、改行は適宜記入した。
- ・本資料内のカッコについては、() の箇所は山村幸氏による注、〈〉の箇所は山田千里氏による注である。

資料 1

昭和 23 年の書簡

(山神府でご一緒だった梶信子様が、後にコピーして送って下さったもの。幼い自分がよく見えます)

大へんごぶさたしてしまひまして、ま
っていらして下さいましたでせうに、ほ
んとにごめんなさいね。

おからだのお具合は如何かしら。おあ
ついでですから、お気をつけになってね。お
やせさんでいらしたから心配です。

ご主人さま、まだかしら。もしかしたら、
もうおかへりになってるかもしれないな
どと思ひながらこれを書いてゐます。主
人の会社の女の方のご主人もこの間おか
へりになった方があってよ。もう一いき

の辛抱よ。おかへりになったら、それこそ、
どんなによいでせう。おせいの高いお立
派な方でいらしたわね。きっとお元気で
ピンピンしておかへりになって、貴女の3
年間のご苦勞をふきとばして下さるでせ
う。お手紙よんでみて思はずポロポロと
涙をこぼしてしまったのよ。私もおんな
じでしたもの。でもきつときつと、くるし
みやかなしみのあとには、それだけの大
きなよろこびがあるものよ。ご主人さま
だつて、どんなにどんなに貴女の事を思
つてかへりたがっていらっしゃるか。3年
まへのけふ、私達はあの思ひ出の山神府
についたのよ。あやめや色々なお花が今
をさかりとさいて美しいところでした。

そしてそれからの 20 日ほどが私の結婚生活でした。そして二年半。たった 20 日間の思ひ出だけを抱いて二年半。どんなに苦しんだでせう。私達、純然たるお見合い結婚で、それもあの時代でしたから、一日の交際もしなかつたのですもの。二年半もわかれてるまに私ね、なんだか結婚したといふ事がうそのやうに思へてくるやうになってしまったのよ。だから、貴女のお気持よりももっとみぢめでした。貴女は美しい思ひ出を沢山もって、何かにつけては思ひ出してなぐさめることもおできでせう。でも、たった二〇日間の事は(ほんとに?)二年半にのぼすとほんのちよっぴりしかないのですもの。でも、やっぱり待ってゐました。そして、まってゐてようございました。

貴女が毎日毎日、ご主人さまの事を思っただけのお気持ちは必ずシベリヤまでとどいていてよ。ご主人さまがおかへりになったら、どんなにおよろこびになるかした。それは心配してたのです。生きてるか死んでるか永いことお互いにわからなかつたのですものね。

あゝ、早くおかへりになるといゝわね。でも、8月9日以来のこと、一わたりおしゃべりするのに一苦勞よ。何からいって、いゝかわからなくなつてしまふのよ。北安や新京でよくたべたわね。あのノートまだあるのよ。あれから丁度一年、あの日記ずっとつゞけました。でもあんまり淋しくななくなつたので(だっていくらおしゃべりしてもなんの反応もないので

すもの)お友達にも注意されて一年でやめました。そして又、引揚げて来てから書きつゞけてみたけど、よい記念になりました。いま一に、あのノートよんでは、あゝこんなころもあつたのだと語り合う日も来るでせう。おばあさんになってよんだら、おもしろいでせうね。ウフフ。

なかなか生活も大へんよ。私達って、スツカラカンだから、きるものからお道具からそろへていかなければならぬでせう。とつても大へん。言ふまいと思ふけど、やいたものやとられたものが残念ね。貴女もご主人さまがおかへりになったら、又々、そうお思ひになってよ。でもまあ、私達は若いのですもの。これからなんですもの、がんばりませうよね。一月にどうしても一万円かゝるの。それで、私もたのまれるまゝに洋裁学院に家事を教へにいたり、お家でお知りあひの方のお洋服のお仕立てをしたりしてゐます。近ければいろいろ教へていたゞけるのにねえ。それやこれやで今のところ私の月の収入は二三〇〇~五〇〇円位なの。でも、もうだめ。十一月ごろにママになるらしいの。ひとあしおさきに。ほ・・・。そのせいかこの間まで、とつても気分がわるくてね、こまりました。お手紙書こう書こうと思ひながら、ちつともまとまらないのですもの。ほんとにごめんなさいね。私もあんまり丈夫な方でないので、これからはきつと苦勞でせう。うまれるの、こわいわ。

前沢さん、そのごどうしていらっしやるかしら。坊ちゃんがおできになつたの

ですって？ずいぶん赤ちゃんほしがっていらしたから、御主人さまおかへりになったらイバレるわねえ。でも、おげんきかしら。

貴女のいつかのお手紙で小野さんのことおき、して、ほんとおきのどくでたまりませんでした。ご一緒に南下してたらいのちがあったかもしれないのね。でも、あのとき、いのちがけで南に下りましたのに、先でどんな事がまってるか、わからないのに、おさそひする事も出来ませんでしたものね。それに金州のひとはやっぱり立ちのきだったらしいのよ。何事も運命とは申せ、あんまりですといひたくなるわね。どんなに沢山の人が心をのこしながらこの世を去った事でせう。私達、こうして生きてあるだけで感謝しなければいけないわね。新しく出発するのよ。ご主人さま早く早くおかへりになりますやうに。さうして。しじゅうはげましあってがんばりませうよ、ご一緒に。このごろ大分気分がいいから、もうごぶさたしません。お手紙またちょうだいね。五

円になったけど。

くれぐれもおだいじにね。ごむりなさってはだめよ。主人からもよろしくって。

ちゃ又ね。幸子

信子様

七月十五日

〈梶信子さんのメモ〉

昭和二十三年の消印でした。

お手紙読みかえすうち、あの当時の事が走馬灯のようによみがへります。苦しい日々でしたが、又楽しみもありました、新京・北安の食べ歩きよかったですね。もう一度したいくらい。

貴女のやさしいお便り読む毎に、美しい方と感じます。お写真見てやはり間違いないと確心しています。上品な心の豊かないい御老女様(老女は失礼ね、わたしよりずっとお若いのに)見習わなくてはと思っています。

資料 2

終戦の日から

八月十五日が来ました。

八月九日に黒河の奥の山神府で朝、ソ連の飛行機が飛びました。パパが「日本のものとは音が違う」と外に出てみました。そしてすぐ隊にかけつけたのです。

お昼近く(十一時頃)に帰って来てすぐ「避難」だとのこと。正午。

少しばかりのものを身につけて、官舎に火を放って南下しました。洪水のため北安で汽車は止まりました。

そして終戦をむかえたのです。貯金をおろそうと思って郵便局へ行き、詔勅をききました。

連絡は一切絶え、ここで死んだら、異民族の中で誰も私の死んだことさえわからないのだと思ったら、どっと淋しさにおそわれました。涙も出ませんでした。なすすべは何もなかった。

二十日、武装解除の日、すべて略奪されました。

新京に移され、小学校の教室に新聞紙を敷いて寝ました。途中、トボトボと歩く私達の長い行列に石や罵声が投げられました。

いつ終わるともわからぬ避難民生活。

みんな持金もなくなって来ました。家族を引き連れて南下させる為の将校さんは、隊から預かったお金を持って逃げました。毎日、赤ん坊から順に死んで行きました。小学校の庭に埋めるための穴掘りの使役も出来なくなるほど、そして、親が子供に何か盗んで来いと言い付けるほどでした。

私は十五日におろした貯金のおかげで、何とか生き延びていましたが、先が見えて来ます。

危ないけど乗り物は動いているとこのことに、女学校の時の校長先生を訪ねて情報を得ました。子供の頃安東の家のお隣のおじさんが、そのころ安東省公署(県庁)の副(知事?)でいらして、終戦直前まで政府の興農〇〇(農林省)の副(次長?)(実質は大臣)、今は日本人居留民団の団長をしていること、まだ治安は何とか保たれているから訪ねてみるようにと言ってくれました。

次の日会いに行ったら、「家族(おばさんや子供達)は避難して居ないが、家は安全だからすぐ来るように」と言って下さ

り、一緒に山神府から来た人達の為にも、何とか手づるをつかみたいと世話役の人にも言って、危険地区も何とか危ないところをきりぬけて訪ねたら、一足違いでゲーペーウー(ソ連の憲兵)に連れて行かれた由。若い男達の中でゆっくりも出来ないで、一晩泊まって安全なところまで送ってもらって避難民の中に帰りました。

その後、帰国したら島崎さんをお尋ねして御礼が言いたいと思ひながら、帰って来てもお礼に何えるようなゆとりもなく、ご消息の調べようもわからず、とうとう今日まで来てしまいました。心苦しくてなりません。

尊房さんに頼みたいのは、国会図書館で調べられないかと思うのです。

おじさまも、青い中国服のよくにあうすてきなおばさまも、もういらっしゃらないと思うけど、私が女学校の一年ごろ、小学生だった秋子ちゃんと弟さんはお元気でいらっしゃると思うのです。

全てのものを失い、希望も何も持てなかったとき、ほんの一寸でも生きる力を

与えてくださったおじさまにお礼が言いたかった。ゲーペーウーに捕らえられてソ連に長く留め置かれたという噂でした。

私の戦後はまだ終わっていないのです。

その後もいろいろな方々に助けられ生きて来ました、

あのとき、みんな物は失ったけれど、心はずっとずっと豊かにしていただきました。すっかり物欲がなくなったので、かえって守られて逆に豊かになった気がしません。

あそこで死んだ命だから、ひとの為に役立つなら何でもしよう！という発想にかかりました。かえって誤解をうけることもあるけどね。

当時、時間だけはたっぷりあったので、日記をつけていましたが、五十何年経って字はすっかり読めなくなりました。紙質も悪かったのね。

(2001年8月19日)

資料3

悲しみは消えない

昭和20年のことです。当時満洲国の北は黒竜江(アムール河)で、ソ連(ロシア)に接し、その対岸の黒河を少し高みに上ったところに山神府の部隊がありました。

この年の6月、当時旅順の教育隊の教官をしていた夫との縁談がまとまり、大連で結婚した私は、7月の初めに夫の新しい任地(国境の護りについてた部隊が沖縄戦にまわり、その後各地の教育隊が廻されたのです)山神府に参りました。

8月9日の朝、いつものように静かな朝食の時、突然飛行機の音。「おかしいな。日本の飛行機の音ではない。一寸様子を見に行ってくる」と言って、夫は部隊へ出かけて行きました。戻った夫に聞かされたのは「自分で持てるだけの物を持って、11時まで山神府の駅に集合せよ。将校1名、下士官1名を付けて家族を南下させる。ソ連が侵攻してきた。」と言う言葉でした。当時ソ連とは不可侵条約を結んでをりましたのに。まさかそんなことがあるとは…。夫の部隊は孫呉でソ連を迎え撃つと言う事でした。

野山は北国の短い夏を咲き急ぐように、見たこともない花も咲き乱れて、昨日ま

では、まるで天国のようでしたものを…。

持てる物には限度があります。僅かの時間にどれだけの準備ができればいいかと。とっさの判断で、経験のない北国の寒さ対策を思いました。

南下する列車に飛び乗って間もなく、窓から官舎に立ち上る大きな火の手が見えました。私の大事な京人形もあの火の中に消えました。和裁の比翼仕立ての練習の為に縫った卒業記念の人形の着物には、一針一針丹念に日本刺繍を施したのに。

「大切な物を済まない。必ず『償い』をするからね。」夫は呻くように申しました。

後で気がついたのは、「生きて帰る」とは云えなかった。約束はできなかったのです。行き先も判らず、唯、大連に実家があるのだけが頼みの綱でした。

途中北安で洪水の為に列車が止まり、そこで15日終戦、21日武装解除、直ぐに略奪と、思いも寄らぬ展開となりました。このまま、音信も途絶え、どこで果てたかも判らずじまいになるのか…覚悟を決めました。

満洲の冬は早いので、略奪の前に着ら

れるものは皆、身につけました。現地の住民は、日本人はお金もどこに隠すかよく知っていて、着物の衿、靴下等はすぐ剥ぎ取られました。紙幣は冬物の男ものの袴下の膝当てのようにして縫い込みました。チリ紙やノートの間にもバラバラにして挟み込みました。剥ぎ取られないように、水筒とバッグを肩から十文字にかけました。お陰で被害は最少でした。汽車が動くようになって新京へと送られ、小学校の教室に新聞紙を敷いて寝ました。身一つなら何とかありますが、子連れの人は大変でした。乳飲み子を持った人はお乳が出なくなり、「泣かすな」と怒鳴る人がいても如何ともし難く、やがて赤ちゃんから順に命を落として行きました。その屍を男の人達が校庭に埋めて、次の場所へ立ち去らなければならない。それはもう、むごいむごい光景でした。

新京では駅近くの小学校から郊外の元連帯の居た緑園と言う地区に移されました。長い道のりを、石を投げられ罵声を浴びせかけられながらトボトボ歩いて移動しました。そして全くの避難民となりました。開拓団の人達も次々に合流して来ました。1日に蜜柑の缶詰の空き缶に1杯の雑炊だけ、みるみる幼い人から順に命を落としてゆきました。母親が子どもに「何か食べるものを盗ってこい」と言いつけています。どこからも援助があるわけではなし、やがて大人も落後していくようになりました。

昔女学校の2年生だった頃、お隣に住

んでいらして安東省次長(副知事)をしてをられた方が、その時、満洲国政府の興農部次長で、この度、日本人居留民団長をしてをられると聞きました。お隣で親しくして頂いたころの小母さまは、省庁の夜会のお迎えの車が来る時は裾の長いすてきな中国服でお出かけの、美しい方でした。小学校5年のお嬢ちゃんと3年の坊っちゃんがをられました。「お会いして見よう。何かお力が借りられるかもしれない」と、市内はまだ治安が保たれていましたから、1人で出かけました。幸い、すぐにお会いできまして、「大変な目に会ったね。とに角、家においで、考えよう。」と言って下さいました。「一旦もどりまして、責任者に話しまして」と約束して帰りました。2日程して伺いましたら、小父様はゲーペーウーに連行されたあとでした。留守番の方々は留まるように親切におっしゃって下さいましたが、やはり心苦しく、一晩泊めて頂いただけで帰りました。

途中、満鉄本社に立寄ってみようと思いつきました。ひょっとして叔父がいたらと思ったのです。たまたま、運よく叔父が出社していて会うことが出来ました。それからは叔父の手配で男装して貨物に乗せてもらうことになりましたが、なかなかその便がつかめず、待たされ続けて、無事大連に辿り着けたのは12月1日でした。

(2012年記 幸91歳)

『間島中学校同窓会報』記事目録

解題

尹国花

中国東北地方の吉林省東部に位置した延辺朝鮮族自治州は、東はロシア、南は朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮と略す）と隣接しており、「満洲国」（以下、括弧省略）期は、間島省と呼ばれていた。

間島中学校は1942年4月1日に設立され、その目的は「間島は朝鮮系が多く思想的にもやりにくい処、日本人も数こそ少ないが民族協和の中心となる立派な学校をつくる」（寺田佐平「忘れかねる同窓会の憶出」『昭和44年間島中学第1期生同窓会記念誌「間島中学校」』より）ためであった。朝鮮人の入学も可能であったが、その数は1割に限定されていた。校訓は、間島の地名に因んで、「敢闘、敢闘、又敢闘」というものであったが、会報ではこれらを総じて「間島精神」と呼んでいる。

間島中学校同窓会が発足したのは、1974年8月18日である。『間島中学校同窓会報』第6号によると、同窓会発足の目的は、「旧満洲国間島中学校の恩師及び在校生を以て組織し、会員の相互親睦と

調達連帯を図ること」であった。翌年には、『間島中学校同窓会報』が創刊され、2005年の最終号までに計19号が発行された。本会報は不定期に発行され、その内容は主に、①同窓会の開催関連記事、②回想録、③訪中・訪韓報告であった。特筆すべきことは、当時の先生や朝鮮人同級生からの投稿も見られることである。

本会報を通じて、日本人学生が回想する満洲像や戦後の活動を確認することができる。また、満洲のなかでも朝鮮人が圧倒的に多かった間島という場所の特殊性から、日本人学生と朝鮮人学生との人間関係も見ていくことができるだろう。

なお本会報は、間島中学校3期生である日高一氏によって提供された。日高一氏は、同じく間島中学校1期生の猪伏昌三氏（本誌6頁参照）より紹介された。日高氏から郵送いただいた会報は、「満洲の記憶」研究会編集委員の佐藤量が複写し、原本をお返しした。このような貴重な史料を本研究会にご提供くださった日高一氏に心より御礼申し上げたい。

凡例

- ・本目録は、間島中学校同窓会が発行していた『間島中学校同窓会報』1～19号の記事目録である。本会報の発行期間は、1975年11月から2005年4月までである。
- ・本目録では、会報各号ごとに記事の情報を掲載頁、記事名、筆者の順に記載した。
- ・記事名、筆者の両項目は、基本的に会報記事内の表記をそのまま記載しているが、記事中の固有名詞以外は旧字体を新字体に変更している。
- ・お詫び記事、訂正記事、会費納入の案内記事、会計報告、執筆者の肩書きや所属などは紙幅の関係上、本目録の記載対象から除外した。

1号 (1975年11月発行)			
頁	コーナー名	記事名	筆者
1		夢だった30年ぶりの同窓会!!	
1		同窓会開催にいたる経過	
1		男盛り、まっとうせよ!!——先輩、後輩を捨てて、間島精神を	寺田佐平
1		生きていてよかった!!——三〇年ぶりの再会を喜ぶ	阿部順造
2		教員なればこそその喜び——録でなし程立派になった	松田功
2		戦争へ行って死ね!!——戦前教育を反省する	上領頼正
2		生き抜いた瞳の輝き——戦車壕掘りの勤労奉仕	前川多助
2		幻の中学同窓会——これからの発展を祈る	牧野剣一
2		間島精神を見た思い——七〇歳の誕生日に二重の喜び	武田唯雄
2		忘れぬ開拓団援農!!——第六感で帰校し	岩瀬貞之助

		てよかった	
2		新しい住所の判明した方がた	
3	クラスだより	家族同伴で第三回クラス会	松本茂規
3	クラスだより	クラス会を明春開催したい	山崎和夫
3	クラスだより	話がつきなかった四時間半	三谷敏夫
3	クラスだより	朋友たち集れ毎年同窓会を	竹下茂毅
3		ふるはと会の開催	
3	随筆	昭和 22 年 8 月 26 日	篠原勝
3	随筆	人との出会い	斉藤実昌
3		住所変更された方がた	
4		「間島の夕映え」を読んで	熊本正臣
4		「間島の夕映え」を読んで	松浦敏明
4		「間島の夕映え」を読んで	寺田憲二
4		「間島の夕映え」を読んで	富田竜雄
4		「間島の夕映え」を読んで	倉掛喜八郎
4	クラスだより 三期生	懐かしい顔、顔 30 余人が集る	久保田立明
4		間中二期会員の消息	
4		なつかしさのあまりに	柳沢計吾
4		同窓会おめでとう	田中義久
4		「間島の夕映え」記念品贈呈について	西尾安広
4		お礼のことば	日高一
4	随想	思いつくまま	東俊昭
4		おくやみ	
4		原稿募集	
4		会費徴収のお知らせ	
4		編集部からのお詫び	山崎和夫
2号 (1977年1月発行)			
1		恩師逝く日におもいつくまま	倉掛喜八郎
1		校長の多年の功績に「勲五等瑞宝章」叙勲	
1		お礼のことば	寺田一典 寺田憲二

2	弔辞	偉大だった校長——安らかに・さようなら	上領頼正
2	弔辞	先生、安らかにお眠り下さい	脇博之典
2	弔辞	校長の訃報をきいて——古里へのお帰り待っています	古財忠男
2		おくやみ	
2		新たに住所のわかった方がた	
3	思い出話に夜もふけて	関西地区同窓会——同窓会報に歓声——隠し芸もとびだす	日高一
3	——同窓会ニュース	第二期生総会——報国塾歌を大合唱——43名で初会合ひらく	寺田憲二
3		第四期生総会——当時の思い出が走馬灯のように——31年ぶりの顔・顔・顔	鮎川義昭、 明渡範次、 竹下茂毅
3		第三期生総会——青葉の京都で——大いに飲み、大いに語る	富田実、三 谷敏夫
3		住所変更された方がた	
4	体験記	少年期	倉掛喜八郎
4	随筆	渤海の思い出	日高一
5	短歌	還骨初七日法要の座にて	倉掛喜八郎
5		事務所からの便り	西尾安弘
6	随想	満洲の四季	三谷敏夫
6	随想	《山陰》《紀行》——旧美保空予科練跡を訪ねて	古財忠男
6		原稿募集	
6		会費徴収のお知らせ	
6		編集後記	山崎和夫
3号（1978年3月発行）			
1		箕面山荘で第2回同窓会開く	
1		少年時代に戻り語りあう——大阪の夜景に感嘆	
1	短歌	第二回同窓会によせて	上領頼正
2		間島魂を忘れるな	武田唯雄

2		箕面雑感——第二回同窓会に出席して	日高一
2		三回忌に参列して	脇博之典
2		住所変更等をされた方がた	
3	各地のたより	紅葉の十和田に集う——東北地区同窓会ひらく——	木村悦郎
3	各地のたより	息の長い同窓会を	内田俊一
3	各地のたより	南国鹿児島で頑張る	久留和
3	各地のたより	同窓会を指折り数えて	立石徳昭
4	随想	汽車通学・香蘭の思い出等から	八幡久司
5	体験記	続 少年期——たびあち	倉掛喜八郎
5		四十代の青春	新山茂樹
6	随想	間中会	閑中夢駄男
6	随想	小樽に想う	宮田久雄
6	随想	趣味三味	斉藤実昌
6	随想	冬きたりなば	篠原勝
7		各ブロック名簿	
7		会費徴収についての一提案	竹下具直
8		新役員名簿	
8		会費徴収のお知らせ	
8		事務局だより	
8		原稿募集	
8		編集室だより	倉掛喜八郎
8		編集後記	
4号（1979年8月発行）			
1	松田先生逝く	松田先生をしのんで	宮田久雄
1	松田先生逝く	野辺におくりて	松田春子
1	松田先生逝く	松田功先生をしのぶ歌	上領頼正
1	松田先生逝く	葬儀に参列して	岩島洋憲
2	松田先生逝く	思い出はつきず	寺田憲二
2	松田先生逝く	嗚呼松田先生!!	笠井恵博
2	松田先生逝く	心に残る言葉	伊与部春彦
2		思い出	山本清寛

3		佳木斯の思い出	能登秀雄
3		延吉の地図と写真を	藤田幸
3		“ギョロ松先生”あの世に逝ったか!!	阿部馨
3		松田先生のことひとつふたつ	鐸木廣恵
3		名著「あの日から」を同窓会に寄贈——同窓会事務局	西尾安弘
4	寺田校長のお墓にぬかづく生徒たち	寺田校長先生をしのぶ歌	上領頼正
4	寺田校長のお墓にぬかづく生徒たち	墓参期	倉掛喜八郎
4	寺田校長のお墓にぬかづく生徒たち	恩師のお花に灯火を——同窓会事務局	西尾安弘
4		卒業証書	内田憲
4		終戦の日の出来事	久保田立明
5		四期生北海道で同期会開く	藤生正昭
5	なもし	伊予の方言	松本茂規
5	俳句		閑中夢駄男
5		戦争とサッカーと	日高一
5		新たに住所のわかった方	
6	LETTER FROM CALIFORNIA	遥かなる大陸より	山本良夫
6	LETTER FROM CALIFORNIA	なつかしのみな様へ	山本潤子
6	LETTER FROM CALIFORNIA	望郷三十有余年	富田実
6		住所等を変更された方（訂正を含む）	
7		父の日に思う	丸山登志雄
7		中年の死亡率	殿井一男
7		アメリカより山元君を迎えて	寺田憲二
7	体験記	続少年期(238 部隊)	倉掛喜八郎
8	地方便り	お見舞一番	

8	地方便り	一期懇親会	
8		金子マスヨ様宅訪問	
8	お知らせ		
8	訃報		
8		原稿募集について	
8		会費徴収について	
8		編集後記	倉掛喜八郎
5号(1981年2月発行)			
1	第3回同窓会 総会、名古屋(犬山)に決定	四年目の再会——名古屋に全員集合	野尻力
1	第3回同窓会 総会、名古屋(犬山)に決定	第三回間島中学同窓会総会のご案内	
1		雪の降る街を	上領頼正
1		同窓会賛歌	上領頼正
1		同窓会賛歌	岩瀬貞之助
1		同窓会の生みの親——西尾栄太郎氏逝く	
2		弔辞	坂見鉄三
2		永遠に信義と愛を	倉掛喜八郎
2		謝辞	
3		なつかしき同窓会の皆様——恩師夫人のたより——	金子マスヨ
3	嗚呼!山内健三君	飲みながら満洲を語った友——いまはなく——	伊与部春彦
3	嗚呼!山内健三君	山内君を偲ぶ	寺田憲二
4	各期クラス会——北から南から	一期報告——雲仙につどう	篠原勝
4	友はつどう!!	二期報告——阿蘇で心の母校を確めあう	古財忠男
4		三期報告——奥入瀬に遊ぶ	石郷岡泰
5	友は語る	間島中学最後の日	高山弘
5	友は語る	二度登る馬鹿	山本清寛

5		北海道を思う	佐内重善
6		準親友と親友	斉藤良孝
6		山崎君の壮行会を開く	
6		思いがけないこと	大田垣栄
6		雑感	久保田立明
6	詩	受験期	閑中夢駄男
7		修羅場 凶門・南陽	倉掛喜八郎
7		雪国こばなし	寒中満洲良男
7		人間様さま	西尾安弘
8	詩集		寺田憲二
8	お知らせ		
8	訃報		
8		会費納入について	竹下具直
8		編集後記	倉掛喜八郎
8		新たに住所のわかった方	
8		住所等変更された方々	
6号 (1982年3月発行)			
1		第3回同窓会 総会、名古屋(犬山)で開く	
1		延辺地区訪問旅行報告並びに追悼の会開かる——於 大阪市西区民センター——	
1		間中和歌寸描	上領頼正
2	追悼の辞	日中友好と人類融和に尽す	日高一
2	追悼の辞	安らかなるご冥福を祈る	安藤照
2	追悼の辞	二度と繰り返すまじ戦争の悲惨	小泉公子
2		二八の丘	古谷友一
2	書籍紹介		
3	訪中団員報告	故郷延吉市の温かい歓迎	猪伏昌三
3	訪中団員報告	『延吉の砂』故郷に帰る	岡文夫
4	日中交流	延吉市長へ御礼——間島中学同窓会事務局	西尾安弘
4	日中交流	日中平和友好の誓い 花束贈呈	

4	日中交流	中国残留孤児よ、再見!!	岡文夫
4	日中交流	訪中の旅	木村悦郎
4	日中交流	日本の皆様へ	裴恒鎮
5		両校同窓会の交流を願って	井上憲俊
5		間島高女初代校長高橋先生逝く	島田清子
5		母校の思い出	鈴木美知子
5		延辺地区訪問報告会——会計を担当して	阿部順造
5		延辺地区訪問報告会及び追悼会収支計算書	竹下具直
5		寄付金多額の御芳志ありがとうございました	
5		おぼえていますか?間島中学の紅一点	
6		決議事項	
6		新役員紹介	
6		会費納入のお願い	
6		お礼を兼ねて同窓会雑感	野尻力
6		朋友便り	山本清寛
6		明治村	閑中夢駄男
7		延辺地区訪問報告並びに追悼の会(関東地区)再開催	
7		随想	牧野潤
7		黒竜江省より図門延吉への旅	土肥礼一
8		在満追憶記	牧野劔一
8	各期便り		
8		編集後記	倉掛喜八郎
8		新たに住所のわかった方	
8		住所等変更された方々	
7号(1985年7月発行)			
1		第四回同窓会総会、東京(後樂園本郷館)に決定	
1		第四回間島中学校同窓会のお知らせ	
1	急逝		
1		生きぬいて城を築く——同窓会に学ぶ	前川多助

1	著書出版案内		
1		「一星霜回顧」について感想	
1		上梓のお祝い	
2		(関東地区)延辺地区訪問旅行報告並びに追悼の会	
2		追悼のことば	
2		収支報告書——延辺地区訪問旅行報告並びに追悼の会	
2		お知らせ	
2		尚此の会の為に御厚志を賜った方	
2		追悼電報	
3		第二回延吉訪問旅行記	上領頼正
3		訪中雑感	山本清寛
3		訪中(延吉)報告会 於東京	
4		訪中(延吉)報告会 於大阪	
4		間島中学同窓会ソウル支部結成に参加して	宇都宮晴久
4		日本を訪ねて	金漢星
4		金漢星氏日本留学	西尾安弘
4		日本留学を終えて	朱澁順
5		延吉市長崔鳳連氏来日 熱烈歓迎	猪伏昌三
5		崔鳳連市長に再会	山本清寛
5	随想	「涙と、満洲と、老化と」	大西晃
5		延吉残留孤児来日(東京・大阪)	山本清寛
5		お知らせ	
6	同期会の思い出		
6		「札幌に満州をしのぶ」	山崎和夫
6		第十回四期生同窓会開く	竹下具直
6		水と現代生活	佐藤孝久
7		四十年ぶりの墓参	日高一
7		「一星霜回顧」各新聞社一斉に激賞!	
7	訃報		

7		住所等を変更された方々(訂正を含む)	
8		“恩師をたずねて” 四期生の手がかり	西尾安弘
8		事務局よりお願い	
8		四期一・二組出席簿	
8		原稿募集	
8		間島中学校同窓会年度別収支計算書	
8		新たに住所のわかった方	
8		会費徴収のお知らせ	
8		編集後記	倉掛喜八郎
8号(1988年7月発行)			
1		第四回同窓会総会、東京(ホテル本郷館)にて盛会に開催!!	
1		遠路韓国より馳参じ旧交を温める	倉掛喜八郎 山本清寛
1		関東中学校同窓会第四回総会式	
1		今回総会の会員以外の参加者	
2		同窓会世話人記	内田憲
2		清・誠・生	前川多助
2		シベリアの思い出	富田龍雄
2		一期生だより	倉掛喜八郎
3		満州・思い出の断片	八幡久司
3		二期生会——伊豆長岡温泉で開催	寺田憲二
4		間中三期会、関西総会——大阪で開催	三谷敏夫
4		関東地区 忘年会	山本清寛
4		韓国だより	韓相国
4		法廷雑感	野尻力
5		四十一年目の再会——少年期の友情の種子	王吉航
5		王吉航氏歓迎の集い	山本清寛
5		40年目の再会	宇都宮晴久
6		海外旅行	倉掛喜八郎
6		中国の旅から	金澤多佳子
7		三宅君を悼む	日高一

7		間島中学校同窓会収支決算書	
7	計報		
7		新しく住所の判明した方がた	
7		住所等を変更された方がた	
8		人生の転機	篠原勝
8		伊予のことば	松本茂規
8		事務局よりお願い	
8		お知らせ	
8		編集後記	阿部生
9号 (1988年11月発行)			
1	第五回同窓会総会、大阪(上町台地なにわ会館)で行います!!	第五回間島中学校同窓会のお知らせ	
1		若くて世を去った友を偲んで	立石徳昭
1		生きる喜び	新山茂樹
2		わが青春、スカウティング!!	島幸雄
2		私の健康法	阿部順造
2		父の思い出	紙屋清治
2		釣と人生	魚住郁夫
3		大阪から、こんにちは	富田実
3		思いつくままに	有馬史典
3		入門	久留和
4		かみそり放浪記	紙屋清治
5		同級会 旅の思い出	丸山登志雄
5		近頃思うこと	内田俊一
5		天理教信者だった母	紙屋清治
6		間島中学校歌日記より	上領頼正
6		あのころを想う	堤昭紀
7		知覧の春	古財忠男
7		死線を越えて	浦猛

7		趣味と剣道	斉藤良孝
8		おめでとうございます	
8	各地からのお便り		
8	訃報		
8		お詫び	
8		事務局よりお願い	
8		住所変更	
8		延吉小学校同窓会名簿調査 ご協力に感謝!	上野昭
8		編集後記	岡文夫
10号(1992年4月発行)			
1	第五回同窓会総会、大阪(なにわ会館)に開催される!!	第五回総会報告	三谷敏夫
1	第五回同窓会総会、大阪(なにわ会館)に開催される!!	会長就任のことば	倉掛喜八郎
2		間島中学校の思い出	上領頼正
2		俳句と野球	田中良久
2		引き揚げの一駒	前川多助
3		在満の思い出	牧野剣一
4		私見「間島中学校恩師点描」	八幡久司
5		宇野脩平二等兵先生	山本清寛
5		間島中学同窓会ソウル支部便り	西尾安弘
5		ソウル支部会長より	韓相国
6		一期生クラス会 鹿児島・宮崎紀行	倉掛喜八郎
6		同窓会雑感	斉藤実昌
7		第五回二期生総会報告	伊与部春彦
7		アメリカ便り第2信——国旗を大切に	山元良夫
7		東俊昭君逝く	古財忠男
8		村山家の戦後の決着	村山昭四郎

8		45年ぶり再開 わびる母——殷長林さん 「会えただけで幸せ」	
8		二期 宇都宮晴久君の司を悼む	大田垣栄
9		四期同窓会 伊予路で開催	竹下茂毅
9		中国旅行記	城一夫
9		“黒柳徹子さんのこと”	大嶋満洲夫
10	近況だより		
10		延吉小学校同窓会 東京で開催される	寺田憲二
10		御礼	上野昭
10		天主堂協会収容所について	山本清寛
11		近詠	上領頼正
11	テーマ投稿	中国で凍死した開拓団少年たち	五木田義重
11		第五回間島中学校同窓会総会収支計算書	
11		平成元年度収支計算書	
11		平成2年度収支計算書	
11		平成3年度収支計算書	
11	訃報		
11		新らしく住所の判明した方	
11		住所等変更された方々	
12		第六回同窓会総会、東京九段会館で挙行！— —九段の散策路に歴史の足音がする	
12	関連図書紹介	「東満・北鮮戦塵録」鈴木武四郎著	
12	関連図書紹介	「回想第三軍」第十一会誌発行委員会	
12		満洲のカットについて	
12		編集後記	山本清寛
11号（1994年10月発行）			
1	第6回同窓会総会 ——東京・九段会 館で開く	第六回総会報告	寺田憲二
1	第6回同窓会総会 ——東京・九段会	福岡で再開しよう——来年10月15日第七 回総会を開催	

	館で開く		
1	第6回同窓会総会 ——東京・九段会館で開く	第6回同窓会次第	
2		敬する寺田校長先生と愛する間島中学校生徒達よ	上領頼正
2		延吉	前川多助
2		前川先生に勲四等——おめでとうございます	脇博之典
2	同窓生の新刊紹介	動員・抑留・予科練「軍国の中学生たち」 貴重な体験記す	西尾安弘
2	同窓生の新刊紹介	平和の尊さつたえる	西尾安弘
5		“わが家”があった凶門訪問記	八幡久司
5		曲水にコンビナート!!——延吉駅の人波に驚く	
6		望郷・慰霊・友好の旅——六月に凶門と延吉へ (上)	倉掛喜八郎
7		趣味に生きる義母——91歳 短歌詠む人生	阿部順造
7		かくしゃくたる人生	倉掛喜八郎
7		住所等変更された方々	
7	訃報		
8		元朝陽川汽車通生の異人国訪問記	山本清寛
8		サンフランシスコの山本家を訪ねて	山本清寛
8		二期生有志が靖国神社参拝	山本清寛
8		口座番号変更	
8		編集後記	H
12号(1996年10月発行)			
1	第7回同窓会総会 ——初めて九州・福岡市で開く	第7回総会報告	篠原勝
1	第7回同窓会総会——初めて九州・福	第7回総会次第	

	岡市で開く		
1	第7同窓会総会— —初めて九州・福岡市で開く	次回総会は京都中心に	篠原勝
1	第10回同窓会総会— —初めて九州・福岡市で開く	出席者の状況	
2	総会・旅行を振り返って		
3	韻事	同窓会を詠める	寺田憲二、 富田実、富田民子
3	韻事	感想	平井貞男
3	韻事	同窓会にて	古財忠男
3		総会のあと湯布院、臼杵へ	松本茂規
3		朝霧に抑留の旅思う	松本茂規
4	旅の思い出		
6		望郷・慰霊・友好の旅—94年6月 凶門と延吉へ (下)	倉掛喜八郎
7		東京周辺3・4期の会—熱海へ“同伴旅行”	仲田久也
8		牧野先生を偲ぶ	西尾安弘
8	弔辞	脇前同窓会長が急逝	倉掛喜八郎
8	弔辞	良い友持ち幸せでした	脇寿美子
8		田中良久先生安らかに	阿部順造
8		第7回間島中学校同窓会福岡総会収支明細書	
8	訃報		
8		住所などの変更	
13号 (1997年11月発行)			
1	京都の第8回総会に参加しよう	2泊3日で京・近江路へ—参加・不参加の返事必ず—平成10年6月7~9日開催	

2	縁——同窓会報に寄せて	“風雲急”——学徒動員生を連れて延吉へ	前川多助
2		念願だった北海道在住者同窓会開く——懐かしい話題盛り上がる	山崎和夫
2		引揚者の原点「葫蘆島」を制作——新京二中の国弘氏	日高一
3		一期クラス会——信州紀行	富田龍雄
4		第七回二期生会 玉造温泉で開く	寺田憲二
4	武田先生との思い出	山形へ先生を訪問——懐かしい武田節、ご冥福祈る	西尾安弘
5	武田先生を想う	「或る文官」のことなど	倉掛喜八郎
5	武田先生を想う	「皆様によろしく」武田晋氏(ご子息)よりお手紙	
5	上領先生 急逝さる	通夜、告別式に各千余人 ご冥福祈る	山本清寛
6	弔辞	上領先生に捧ぐ	寺田憲二
6		上領先生をしのんで——五年前に一緒に延吉訪問	山本清寛
6		先生ご夫妻は縁結びの神——妻を紹介ご媒酌も	本郷郁雄
7		上領先生四十九忌に参じて	倉掛喜八郎
7		あの時代に体罰与えなかった“軍人教師”——若き日の先生しのぶ	倉掛喜八郎
7		憧れだった軍服姿の上領先生——「身体を大事にして楽しくいきよ」と!	太田垣栄
8		先生は私の教職生活の原点	石塚寿雄
8		同窓会の皆様へ	上領千代
8	韻事	関東中学同窓会報に寄せられた上領先生の短歌より抜粋	
8	韻事	ヒマラヤの旅 俳句と短歌に	八幡久司
8	訃報		
8		住所などの変更	

8		会費振り込み先	
8		編集後記	H
14号(1998年10月発行)			
1	盛会だった第8回 同窓会総会	総会報告	三谷敏夫
1	盛会だった第8回 同窓会総会	同伴者含め72人参加——米・韓から3組の 夫妻——新会長に寺田氏	
1	盛会だった第8回 同窓会総会	次期総会北海道で	
1	盛会だった第8回 同窓会総会	第8回間島中学校同窓会葬式次第	
1	盛会だった第8回 同窓会総会	新役員	
2		引揚途中の“出会い”	前川多助
2		会長就任にあたって	寺田憲二
2		同窓会総会を終えて思うこと	松本茂規
2		五十年ぶりの再会に感動	李丙晁
2		「おおきに」と「すんまへん」と…	富田實
3		第八回間中同窓会回想記	富田龍雄
3		思い出すままに	田中晁
4	二期生会韓国で開 く	ソウルツアーに参加して	木村悦郎
5	二期生会韓国で開 く	念願のソウルを訪ねて	山崎和夫
6		京都で第八回同窓会総会を終えて	大田垣栄
6	弔辞	倉掛前会長安らかに 深い哀悼の意をこめ て	寺田憲二
6		倉掛君たくさんの思い出ありがとう	新山茂樹
7		「軍国の中学生たち」発刊に意欲——倉掛 前会長を偲んで	阿部順造
7		手放せない一枚のペン画——“倉掛君友情 はいつまでも”	島幸雄

7	弔辞	古財君に捧ぐ	寺田憲二
7		親友古財忠男君を想う	寺田憲二
8		早川君ご冥福を祈ります	水戸一郎
8		皆様のご厚情に感謝	古財つえ子
8		故上領先生の一周忌法要	山本清寛
8		舞鶴引揚記念館を訪問して	篠原勝
8	韻事		
8	訃報		
8		第8回間島中学校同窓会(京都総会)収支明細書	
15号(2000年2月発行)			
1	少年少女時代を生きた“あの町”へ行こう	延吉、瀋陽、大連を訪問—間中、間女、延小同窓会呼びかけ	
2		和歌山で一期生の会 今後は毎年開催に	北猛
2		ボチボチ行こうよ	松本茂規
2		紀州路へ出発の朝	丸山登志雄
3		第8回2期生会讃岐路で開く	熊本正臣
3		「一星霜回顧」希望者に進呈	
3		楽しみな延吉再訪	丸山宏幸
4		2期生会に参加して	山崎和夫
4		旧軽井沢を散策 熱海で新年会も——3、4期有志の会	
5		「石峴」回想	阿部順造
5		盛会だった宮崎先生(延吉小)囲む会	
6	弔辞	能登秀雄君に捧ぐ	寺田憲二
6		能登秀雄君を悼む	木村悦郎
6		瀬戸宗治君安らかに	木村悦郎
6		ご厚情に深謝	瀬戸新一
6	訃報		
6		住所などの変更	
6		編集後記	H

16号 (2000年12月発行)			
1	札幌の第9回総会 にぜひ参加を	札幌と登別に宿泊し懇談——平成13年10 月4日～6日	
1	札幌の第9回総会 にぜひ参加を	旅程表	
2		“みちのく”で一期生会開く	新山茂樹
2		20年が再開喜ぶ	田中晃
3	「延吉友好訪中の 旅」写真報告	大連・旅順	
3		旅の日程概要	
4	「延吉友好訪中の 旅」写真報告	延辺地区	
5			
6	「延吉友好訪中の 旅」写真報告	瀋陽	
7		延吉訪問・報告	山本清寛
7		旧ドイツ教会はなかった	山本清寛
7		四川省・長江を旅して	平野誠
8		オーストリアを演奏旅行	石塚寿雄
8		思い出すままに	丸山宏幸
8	訃報		
8		住所などの変更	
8		編集後記	日高
17号 (2002年5月発行)			
1	大成功だった札幌 の第9回総会	総会報告	山崎和夫
1	大成功だった札幌 の第9回総会	海外含め六十九人参加——二泊三日で旧交 温める	
1	大成功だった札幌 の第9回総会	参加戴き有り難う	宮田久雄
1	大成功だった札幌 の第9回総会	第9回間島中学校同窓会総会式次第	
1	大成功だった札幌	新役員	

	の第9回総会		
1		次期東京総会で皆様のご意見を	
2		会長挨拶	阿部順造
2		有意義だった総会後の私的な旅——シベリア抑留者と懐かしい話題弾む	篠原勝
2		出合い、思い、懐かしさ——元気もらった北海道総会	平野誠
2		地元幹事さん有り難う	新山茂樹
3		間島中学同窓愛札幌総会に参加して——北海道の旅で満州の広野思う 帰らぬ父偲んだ前年の延吉訪問	渡井せい
3		延吉小の卒業写真見つかる——希望者に送ります	丸山宏幸
4		三・四期生有志が大雪山国立公園周遊の旅	水戸一郎
4		赤穂岬で関西地区3期生有志が集う	
4		上野・伊勢志摩で同期会計画	阿部順造
5		新疆ウイグルの旅	平野誠
6		シベリア抑留を取材——延吉小十七期の上村さん	
6		大切な早期発見、早期治療——前立腺肥大症の手術を受けて	篠原勝
6		間島中学各年度会計報告	
6		延吉訪中団員の前田氏(延小)が急逝	山本清寛
6	訃報		
6		住所などの変更	
6		編集後記	日高
18号(2003年12月発行)			
1	東京の第10回総会に参加しよう	鎌倉、箱根の観光旅行も	
1	東京の第10回総会に参加しよう	日程表	
1		札幌総会を顧みて	有馬史典

2		北海道闘争会 層雲峡で開く	山崎和夫
2		蟹の食べ放題に挑戦——小樽で北海道同窓会開く	山崎和夫
2		淡路島で関西3期生会	日高
3		釜山・慶州・ソウル訪ねる——三・四期生韓国で同窓の集い	丸山宏幸
3		訪韓 歓迎あいさつ	李丙晁
3		韓国旅行の思い出	菅野智(夫人)
3		気付いたこと 感心したこと	丸山宏幸
4		第九回二期生会 韓国で開く	石塚寿雄
5		韓相国君について(間島中学・韓国同窓会長)	山本清寛
5		思い出の韓国旅行	東静子
5		私の戦後史	韓相国
6		しまなみ海道でクラス会	篠原勝
6		“秋雨に玉砂利踏んで”伊賀上野に集い、伊勢志摩へ	有馬史典
7		石岬会も二世の時代—小学校同窓生と京都めぐる	山崎和夫
7		平和記念フォーラムに参加して——日高氏“間島体験”語る	阿部順造
8		追悼 伊佐時生君	西尾安弘
8		韓国よりご冥福祈ります——伊佐夏代様	康済天・金 [王施]
8		お礼の言葉	伊佐夏代
8		天野君 ご冥福祈ります	丸山宏幸
8		お礼の言葉	天野八重子
8		上領先生七回忌法要に出席	本郷郁雄
8	訃報		
8		編集後記	日高ひとし
19号(2005年4月発行)			

1	“有終の美”飾った第10回東京総会	総会報告	山本清寛
1	“有終の美”飾った第10回東京総会	韓国の8人含め79人集う——今後は地域や同期で会を	
1	“有終の美”飾った第10回東京総会	産経汽車が総会傍聴——在満校の同窓会を特集	山本清寛
1	“有終の美”飾った第10回東京総会	第10回間島中学校同窓会東京総会式次第	
2		語り継ごう戦争体験——歓迎のご挨拶	阿部順造
2		同窓会経過報告	西尾安弘
2		東京総会出席に感謝	丸山宏幸
3		同窓会解散の提案	本郷郁雄
3	恩師のことば	在満日記から	前川多助
3	恩師のことば	私の延吉の思い出は冬	上領千代
4		最後の同窓会に参加して	阿部順造
4		自由な思考育む余地も——教師に大正ロマンの薫り	平野誠
4		思い付くままに最後の総会に寄せて	猪伏昌三
5		盛り上がった最後の宴——雨の鎌倉・箱根巡る	丸山宏幸
5		最後の総会欠席は残念——一生忘れない間島中学——励ましや総会報告に感謝	山崎和夫
5		小学校同窓会調査異聞——「高原君ア・ソ・ボ・ー」仲良しが気付かず近くに	上野昭
6		新聞記事きっかけに 60年ぶりの再会果たす	和泉満雄
6		延吉再訪、変貌に驚く——焼津の宿で歓談	堀内博司
6		我が回想小記——同窓会解散に際し	竹下茂毅

6		同窓会に思う	渡辺正雄
7		満州の思い出	新山茂樹
8		玄界灘に友誼の橋を	濟天
8		中国東北三省を訪ねる	平野誠
10		間島中学同窓会報に寄せる	木村悦郎
11		回想	上野昭一郎
12		私の間島中学校	梅田一美
12		回想の記	仲田久也
13		間島中学同窓会に参加して	渡井せい
13		間島中学の皆さん有難う	立石徳昭
14		間中 思い出すまま	八幡久司
15		たった五ヶ月の強い絆——戦後残留、引揚げ後も苦難続く	菅野智
16	篠原さん、シベリア抑留語る	最後の総会「有終の美」ありがとう	篠原勝
16		間島中学校各年度別会計報告	
16		“君が代”の「さざれ石」	山本清寛
16	訃報		
16		住所などの変更	
16		編集後記	日高一

延辺朝鮮族自治州調査記

——延吉と龍井を中心に——

佐藤量、湯川真樹江、菅野智博、尹国花

本稿は、2016年8月18～20日に「満洲の記憶」研究会（以下、記憶研）の有志によって実施された、中国吉林省延辺朝鮮族自治州調査の記録である。本調査では、民族や国家をめぐる場所の記憶に注目しながら、延吉市、和龍市、図們市、龍井市を訪問し、都市の景観観察や「満洲国」（以下、括弧省略）期の建築物見学を実施した。調査には、記憶研の尹国花、菅野智博、佐藤量、湯川真樹江の4名が参加し、湯川以外の3名は18～19日のみの参加となった。本稿では、自治州の中心都市である延吉市と龍井市での調査内容を報告する。なお、本号掲載の「追憶——満洲点描」と「戦後延吉での生活——終戦から引揚げまで」も併せて参照されたい。

1. 国家と民族がせめぎあう地域・延辺

延辺朝鮮族自治州は、中国の吉林省に位置する朝鮮族の自治州であり、1952年

に設置された（1955年までは「延辺朝鮮自治区」）。当該地域は、ロシア、朝鮮民主主義人民共和国と隣接しているため、政治や経済の面において中国東北部の中で重要な役割を果たしてきた。その中心都市である延吉市には、約54万人が暮らししており、そのうちの約57%（2016年）が朝鮮族である。街中にはハングルがあふれているし、タクシーの運転手の多くも朝鮮語を話し、日常的に朝鮮料理を食べる。人々は、朝鮮の文化を大切にしながら暮らしていた。

延辺朝鮮族自治州は、かつて満洲国期に間島省と呼ばれ、日本人と関係の深い場所であった。満洲国期には、軍や満鉄関係などの職に就いていた日本人が、朝鮮人⁽¹⁾や漢人などの複数の民族と混住していた。また敗戦直後には、他の地域から引揚げてきた開拓団が避難生活を送る避難場所にもなった。さらには、日本軍捕虜を

ソ連に移送するための中継地点として捕虜収容所も設置されていた。延辺で生まれ育った日本人だけでなく、開拓団やシベリア抑留者など、延辺はさまざまな立場の日本人の記憶に刻まれた場所であった。

そして、延辺朝鮮族自治州の中でも、特に日本人とゆかりがあるのが龍井市である。日本は1907年に朝鮮人を保護するという名目で、龍井に朝鮮統監府臨時間島派出所を設置した。また、1909年には間島協約を理由に吉会鉄道の敷設権を獲得し、龍井に間島日本総領事館を設置して、移住朝鮮人に対する統治を始めた。以降、日本の敗戦まで龍井には官公庁などに勤務する日本人も多数暮らしていた。



龍井市街の様子

撮影日：2016年8月19日

撮影者：湯川真樹江

龍井は日本人にとって重要な地であったと同様に、朝鮮人にとっては民族独立運動の中心地でもあった。1910年の韓国併合後、朝鮮半島の多くの民族運動家ら

が満洲に亡命し、既に形成された朝鮮人社会を基盤として国権回復のための抗日民族運動を展開した。龍井はその中心の一つであった。1919年には朝鮮の「3.1独立運動」の一環として、3月13日に約3万人が各地から龍井に集まり、抗議運動が行われた。また、龍井は民族教育の中心でもあった。龍井には、瑞甸書塾をはじめ、明東中学校、大成中学校など多くの民族学校が設置された。これらの学校では、近代教育を実施すると同時に、民族教育を通じて多くの抗日・民族独立運動家を育成してきた。



「靑山里抗日大捷紀念碑」

撮影日：2016年8月18日

撮影者：菅野智博

2. 「龍井タウンマップ」の記憶

記憶研のこれまでの活動のなかで、池田雅躬氏や西田純明氏、猪伏昌三氏など、複数の延吉や龍井出身者と出会い、彼らを対象とする資料収集や聞き取り調査を実施してきた。そのなかで、池田氏からは「龍井タウンマップ」という地図を譲り受けていた。この地図は、かつて龍井に暮らしていた日本人たちが、戦後に再び集まって記憶を頼りに作成したものである⁽²⁾。手書きのため、方位や縮尺は正確ではないが、どこの場所にどのような店や学校があったかなどが記された記憶地図である【図1】。このような記憶地図は、龍井だけでなく大連や新京などほかの満洲の都市出身者たちも作成する傾向にあり、地図を作成する過程も含めて「ノスタルジア」を喚起した。今回の龍井調査では、この「龍井タウンマップ」を手掛かりに、日本人にとって馴染みのある場所をめぐった。

まず訪れたのは、旧間島総領事館である。旧間島総領事館のあった建物は龍井市政府によって使用され、日本による侵略の歴史を伝える展示館となっていた。展示内容は、朝鮮人への拷問風景や民族抵抗の様子が絵画や蝋人形などによって物々しく表現されていた。特に取調室のあった地下室はそのまま残され、水牢などは当時の厳しい状況を伝えていた。旧間島総領事館は、「愛国主義」と「民族精神」を表象した場所であった。

次に「龍井地名起源之井泉」を訪ねた。「龍井地名起源之井泉」は、龍井市の地名の由来となった井戸であり、1879年より朝鮮からの移民であった張仁碩(장인석)、朴仁彦(박인연)により発見された場所である。この井戸は文化大革命の時期に1度破壊されたが、1987年龍井市政府により復元され、現在は小さな公園のなかに位置している。



旧間島総領事館

撮影日：2016年8月19日

撮影者：菅野智博



「龍井地名起源之井泉」

撮影日：2016年8月19日

撮影者：湯川真樹江



龍井中學校



「抗日時期革命烈士」の記念碑



日本人名が刻まれた墓石
 撮影日：2016年8月19日
 撮影者：湯川真樹江

井戸から大通りを歩き続けると、旧大成中学校があった。ここは現在、龍井中学校として利用されている。かつて龍井一帯には恩真中学校（1920年～）、明信女子中学校（1920年～）、永新中学校（1921年～）、東興中学校（1921年～）、大成中学校（1921年～）、光明女子中学校（1926年～）、が存在していたが、再編を重ねて1985年に龍井中学校に統合されている。現在の龍井中学校には、満洲国期の旧大成中学校校舎の一部が展示館として利用され、民族教育の拠点であったことが強調されていた。

町の東部には丘陵地帯が広がっており、そこは「東山」と呼ばれている。東山一帯には、恩真中学校、教師住宅、収容所、「慰安所」⁽³⁾、そして日本人墓地などがあったため、日本人の記憶に深く刻まれている場所であった。しかし現在は、高層アパートや広場、公園が整備され、公園には「抗日時期革命烈士」の記念碑が建立されており、当時の面影はない。かつてこの地にあった日本人墓地の形跡もなかったが、別の場所で日本人の名前が刻まれた墓石を確認することができた。それらは中心地にある龍井市文物管理辦公室の庭に割れたり壊れたりした状態で無造作に置かれていた⁽⁴⁾。どのような経緯でこの場所に放置されているのかは定かではない。

その龍井市文物管理辦公室だが、建物の外観から教会と思われる建築様式であった。市内中心部の大通りに面した敷地

の庭には、墓石のほかにも灯籠や石碑など、日本語やロシア語が刻まれた石造物が放置されていた。興味深いことにこの場所は、市内中心部に位置するにもかかわらず記憶地図には記載されていなかった。歩いて回ったことで偶然発見したこの場所について帰国後確認すると、おそらく旧聖潔教会とみられ、おもに朝鮮人によって使用されていた教会であると推測された。教会組織は現在も大韓聖潔教会として韓国各地で活動しており、朝鮮人との関係が深い。この建物は、1982年に龍井朝鮮族民俗博物館となり、1994年に吉林省愛国主義教育基地に指定されたのち、現在は龍井市文物管理辦公室として利用されている。日本人の記憶からこぼれ落ちていたこの場所は、朝鮮民族や中国国家の記憶が表象される空間として機能していたのであった。



無造作に置かれた石造物
 撮影日：2016年8月19日
 撮影者：菅野智博



旧聖潔教会
 撮影日：2016年8月19日
 撮影者：湯川真樹江

3. おわりに

「龍井タウンマップ」を頼りに龍井の町を巡ったことでわかったことが2つある。ひとつには、日本人にとっての記憶の場所は極めて断片的であり、実際の龍井の町のなかでも限られたエリアであったということである。おもに学校、住宅、収容所、墓地などが日本人にとって強く記憶されている場所であるが、それらの場所を結ぶ途中には、朝鮮人や漢人の暮らすエリアが広がっていた。朝鮮人が集まっていた旧聖潔教会は、日本人の記憶地図には記載がなく、日本人の記憶からこぼれおちていた。満洲国期の龍井の都市

構造をめぐって、どれほど民族別の居住構造があったか、民族間交流がどれほどあり得たのかなどについて今後調査していきたい。

もう1つは、様々なアクターによる重層的な記憶である。龍井には、日本人以外にも、朝鮮人や中国人をめぐる記憶の場所が混在していた。「龍井地名起源之井泉」や旧聖潔教会のように朝鮮人にゆかりのある場所もあれば、旧間島総領事館や「抗日時期革命烈士」の記念碑のように中国国家の歴史が表象された場所もあった。他方で、龍井市文物管理辦公室で放置されていた日本人の墓石や、破壊と修繕を経て現在に至る「龍井地名起源之井泉」などもあり、記憶と忘却を繰り返しながらこの場所の集合的記憶が形成されていく様子が見て取れた。今回の調査でも、都市に埋め込まれた国家や民族の重層的な記

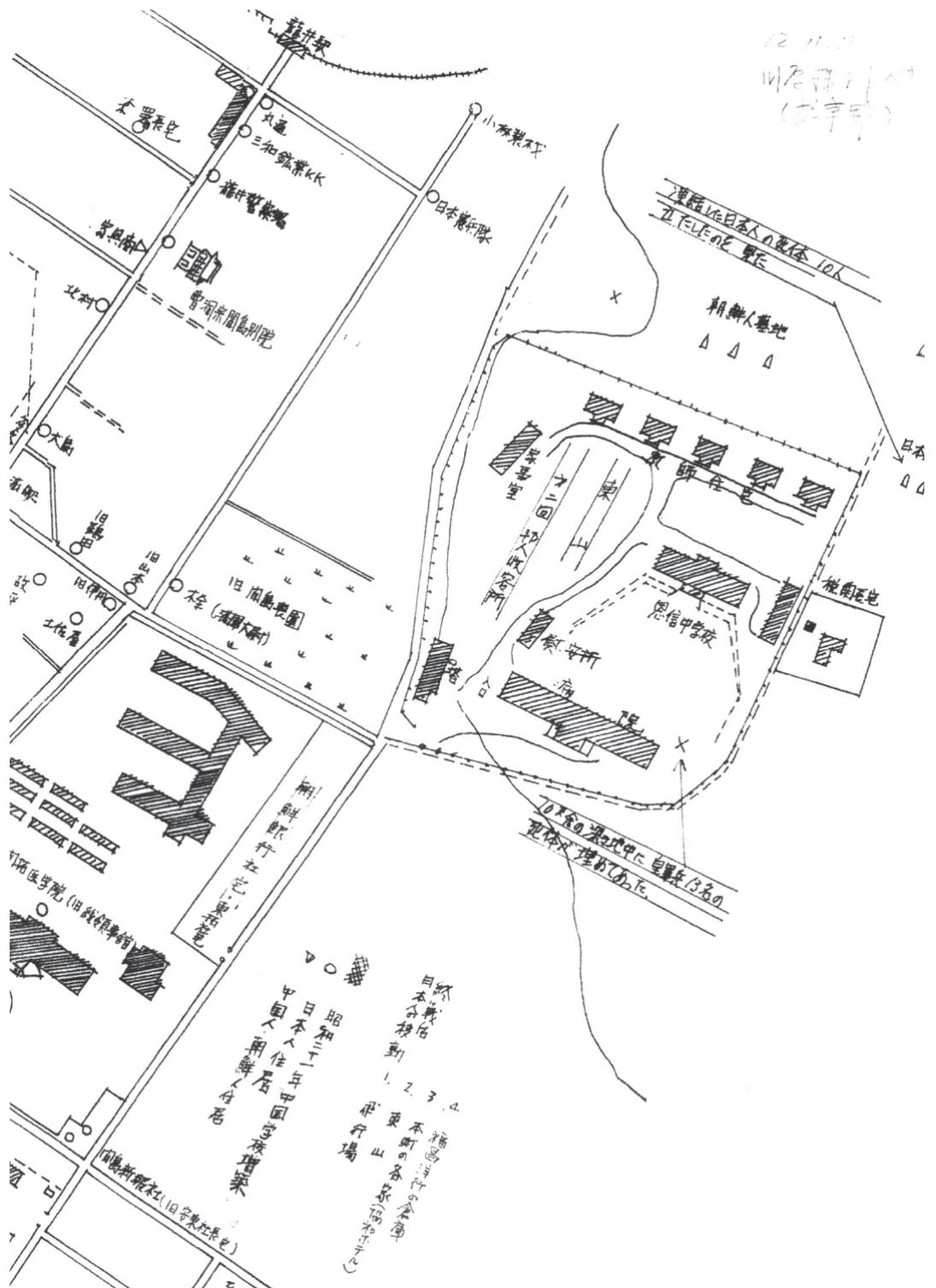
憶と歴史を読み解くことの重要性和面白さを感じることができた。今回の発見もふまえて、今後も調査を継続したい。

(1) 本稿で使用している朝鮮人という表記は、中華人民共和国建国の1949年より前から一般的に使われていた。当時の新聞においても1949年以前は朝鮮人という表記を使い、1949年以降は朝鮮族と表記したことが確認できるため、朝鮮人と表記する。

(2) 龍井に暮らしていた日本人は「海蘭会」という団体を形成し、引揚げ後も交流を継続している。ちなみに「海蘭」という名前は、龍井市を流れる海蘭川にちなんで名づけられた。

(3) 戦後設けられた「慰安所」。日本人女性がソ連軍兵士を相手に接待した。

(4) 龍井市文物管理辦公室は「龍井タウンマップ」に記されている本願寺医院の近くにあった。



【図1】「龍井タウンマップ」の一部

寄贈資料目録

本目録には、2016年8月1日から2017年7月31日までに本研究会に寄贈していただいた資料を掲載しました。他にも貸与していただいた資料や写真、ハガキ、書簡、切抜も多くありますが、紙幅の関係上ここでは省略させていただきます。また、多数の資料を提供していただいた方の資料名は一部のみ（5冊まで）紹介させていただいております。

本研究会では皆様からいただいた資料をより多くの方々にご利用していただ

るように整理・保管し、ニューズレター発行の機会などを通じて順次公開していく予定であります。

本研究会に貴重な資料を寄贈・貸与していただいた方々には、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。また、今後も継続して資料の収集を行っていく所存ですので、御理解・御協力の程よろしくお願ひ申し上げます。

(50音順)

団体や個人が所蔵していた貴重な史資料を多数ご寄贈いただいた方を紹介させていただきます。紙幅上の関係により詳細な目録を省略させていただきます。

飯塚洲一氏

- ・奉天教育専門学校附属小学校・奉天千代田小学校同窓会『会報ちよだ』第18号

猪伏昌三氏

- ・阿部順造「ダモイのうた」私家版、刊行年不明

遠藤和子氏

- ・市原善積『満鉄特急あじあ号』原書房、2010年
- ・川崎彊『長春・瀋陽・大連 追憶の奉天を行く』ワープロ出版、1985年
- ・佐野真一『阿片王——満州の夜と霧』新潮社、2005年
- ・佐野真一『甘粕正彦 乱心の曠野』新潮社、2008年
- ・中村猛志『さらば無蓋車の旅』私家版、2006年

大石剛氏

- ・さんざし会『糖葫蘆 帰国 60 周年記念号』第 13 輯

河合明博氏

- ・記念誌編集委員会編『平安よ永遠に 奉天平安小学校創立 80 周年記念』奉天平安小学校同窓会事務局、2014 年
- ・奉天平安小学校同窓会『わかくさ』第 40 号

北原雅人氏

- ・北原雅人「雅以の満州」（原稿）
- ・「奉天千代田まっぷ」

吉良純氏

- ・満洲事情案内所編『満洲国の習俗』満洲事情案内所、1935 年
- ・満洲事情案内所編『蒙古事情概要』満洲事情案内所、1935 年

斎藤陽一氏

- ・今井正三『日誌』

末広一郎氏

- ・『嫩訓の思い出』（30 号以降『嫩訓八洲会だより』）、1～54 号（うち 37-39、41-54、臨時号を寄贈、ほか貸出）
- ・42 号以降の『嫩訓八洲会だより』PDF データ DVD 寄贈
- ・『満蒙開拓平和通信』第 1 号（2017 年 7 月）寄贈

- ・15 年渡満第三次義勇隊 八家子開拓団 渡辺会会報『もみじは青くして』創刊号（昭和 61 年度）および第 10 号（平成 7 年、終焉号）寄贈

高橋健男氏

- ・高橋健男『帰ってきたニコウキスゲ——満州建設勤労奉仕隊の制度体系と新潟・清和開拓団班の活動の全貌』創英社、2016 年

故成瀬雅春氏（成瀬晶子氏）

- ・国本成好『あのとき』私家版、1993 年
- ・輔仁同窓会『満洲医科大学四十周年記念誌（附・業績集）』輔仁同窓会、1952 年
- ・満洲医科大学輔仁会『会員名簿（1984 年 1 月）』私家版、1983 年
- ・アカシヤ会（満洲製鉄鞍山病院会）『（写真集）私の鞍山』アカシヤ会（満洲製鉄鞍山病院会）、1979 年
- ・輔仁会満洲医科大学史編集委員会編『柳絮地に舞ふ——満洲医科大学史』輔仁会満洲医科大学史編集委員会、1978 年

西川順芳氏

- ・西川順芳『七期の絆』第 94-15 号

林隆治氏

- ・鈴木玄吉・鈴木大亮『檻樓々々一路』志學社、2017 年

樋口優子氏

- ・「満洲紀行」(手稿)
- ・成澤多美也『満洲産業叢書第六輯 満洲と森林』東亜旅行社、1943年
- ・満鉄鉄道総局『秋のグラフ』満鉄鉄道総局営業局旅行課、1937年
- ・満鉄鉄道総局『奉天附近のハイキング案内』
- ・南満洲鉄道株式会社『満洲旅行の栞』

日野俊昭氏

- ・「新京春光在満国民学校クラス写真など」(DVD)

松井弘氏

- ・奉天会『奉天会会報』第1-21号
- ・奉天広告社「遊覧大奉天案内」

村山弘子氏

- ・早川孜『ぼくの大連』新潮社、1983年
- ・富永孝子『遺言なき自決——大連最後の日本人市長・別宮秀夫』新評論、1988

年

- ・浅野幾代『大連物語』文芸社、2003年
- ・大連光明台小学校同窓会『大連光明台小学校七〇周年記念誌』大連光明台小学校同窓会、2003年
- ・大連光明台小学校同窓会『光明 光明会員名簿』大連光明台小学校同窓会、1993年

森川英子氏

- ・文芸春秋社編『されど、わが「満洲」』文芸春秋、1984年
- ・新京案内社編『(復刻版)新京案内(康德六年版)』アートランド、1987年
- ・満史会編『満洲慕情 全満洲写真集』謙光社、1971年
- ・国書刊行会編『写真集 さらば新京』国書刊行会、1994年
- ・栗原仲道『新京の地図——長春回想記』経済往来社、1982年

(文責：菅野智博)

2016年度（2016年8月～2017年7月）

「満洲の記憶」研究会活動記録

- 2016年8月2日 外林会関係者武藤隆氏
訪問 参加者：大野絢也
- 2016年8月3日 外林会関係者藤田諭氏
訪問 参加者：大野
- 2016年8月8日 拓霊芳魂碑訪問 参加
者：大野
- 2016年8月8日 埼玉県旧荒川村の招魂
碑訪問 参加者：大野
- 2016年8月14日 葛根廟事件遭難者慰
霊法要訪問 参加者：瀬尾光平、森巧
- 2016年8月27日～28日 五族の墓奉賛
会参加 参加者：佐藤量
- 2016年9月4日 日本オーラル・ヒスト
リー学会第14回大会セッション報告
司会者：佐藤量、報告者：飯倉江里衣、
菅野智博、湯川真樹江、
- 2016年9月10日 高橋健男氏（『新潟県
満洲開拓史』著者）訪問 参加者：大野、
森、湯川
- 2016年9月10日 二龍山開拓団慰霊碑
（本成寺）訪問 参加者：大野、森、湯
川
- 2016年9月11日 満洲興農会会長清田
三吉氏訪問 参加者：大野、森、湯川
- 2016年9月27日 満洲引揚者（奉天）
大石剛氏訪問 参加者：大野、菅野
- 2016年9月28日 第24回定例会（オン
ライン会議） 参加者：尹国花、大野、
菅野、佐藤（量）、森、湯川
- 2016年10月2日 中国残留孤児問題フ
ォーラムに参加 参加者：大野、菅野、
森
- 2016年10月14日 わかくさ会（奉天平
安小学校同窓会）参加 参加者：大野
- 2016年10月19日 満洲引揚者（大連）
村山弘子氏訪問 参加者：大野、菅野
- 2016年10月20日 引揚70周年記念の
集い参加 参加者：尹、大野、菅野、森
- 2016年10月15日 大同学院二世の会法
事参加 参加者：佐藤（量）
- 2016年11月12日 満洲引揚者（安東）
古海健一氏訪問 参加者：大野、菅野、
森
- 2016年11月15日 奉天千代田小学校同
窓会懇親会参加 参加者：大野

- 2016年11月25日 満洲引揚関係者(奉天)松井弘氏訪問 参加者:菅野
- 2016年12月4日 中国帰国者の会会長・故鈴木則子氏ご息女鈴木希美子氏・大塚栄子氏訪問 参加者:森、湯川
- 2016年12月9日 第25回定例会&勉強会 参加者:飯倉、尹、大野、菅野、佐藤(量)、森、湯川
- 2017年1月13日 蘭星会平成29年新年会 参加者:飯倉、湯川
- 2017年1月19日 柴田照子氏(大連弥生高等女学校)インタビュー 参加者:佐藤(量)
- 2017年2月11日 第26回定例会&勉強会 参加者:尹、大野、菅野、佐藤(仁)、佐藤(量)、瀬尾、森、湯川
- 2017年2月11日 「満洲の記憶」研究会2016年度秋季大会 参加者:尹、大野、菅野、佐藤(仁)、佐藤(量)、瀬尾、森、湯川
- 2017年2月13日 日本森林技術協会書庫訪問 参加者:大野、同席者:永井リサ先生、竹内實昭氏
- 2017年2月13日 長春会会長磯部荀子氏訪問 参加者:菅野、佐藤仁史、湯川
- 2017年2月16日 山本条太郎(満鉄総裁)胸像碑訪問 参加者:大野
- 2017年3月25日 中国吉林省長春市勝利公園訪問 参加者:湯川
- 2017年4月1日 満洲引揚者(大連)故笠原雅子氏訪問 参加者:菅野、佐藤(量)
- 2017年4月2日 第27回定例会&勉強会 参加者:飯倉、尹、大野、菅野、佐藤(量)、森、湯川
- 2017年4月9日 阿賀の館訪問 参加者:大野、瀬尾、森、湯川
- 2017年4月9日 清田三吉氏(満洲興農会関係者)インタビュー 参加者:大野、瀬尾、森、湯川
- 2017年4月15日 第18回哈爾濱学院記念碑祭参加 参加者:大野、森
- 2017年4月17日 第44回満蒙大陸林業人物物故者慰霊祭(旧外林会)参加 参加者:大野、湯川
- 2017年4月30日 満洲鞍山での戦没者記念碑訪問 参加者:大野
- 2017年5月21日 蘭星会平成29年度総会・慰霊祭 参加者:飯倉、瀬尾
- 2017年6月6日 第28回定例会(オンライン会議) 参加者:飯倉、大野、菅野、佐藤(量)、瀬尾、森、湯川
- 2017年7月23日 第29回定例会・勉強会 参加者:飯倉、大野、菅野、佐藤(量)、森、湯川

(文責:湯川真樹江)

2016 年度秋季大会報告要旨

「満洲の記憶」研究会は、2017 年 2 月 11 日に研究報告の場として、2016 年度秋季大会を一橋大学国立キャンパスにて開催した。今回は、尹国花氏と瀬尾光平氏の研究報告であった。当大会では約 20 名

の方々に参加していただいた。2 つの報告に対して、多数の示唆に富むコメントをいただき、興味深い議論が展開されるなど、所期の目的を達成できた。

報告 1

尹国花（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）「戦後延辺をめぐる日本人の記憶（仮）——間島中学校同窓会の訪中・訪韓を中心として」

2017 年 2 月 11 日の「満洲の記憶」研究会の秋季大会では、「戦後延辺をめぐる日本人の記憶（仮）——間島中学校同窓会の訪中・訪韓を中心として」というタイトルで報告を行った。本報告は、間島中学校同窓会が発行していた会報『間島中学校同窓会報』の分析を通じて、間島中学校同窓会の活動、特に訪中・訪韓活動に着目し、戦後満洲引揚者の「故郷」に対する認識の変遷について考えることを目的とした。

間島（現中国吉林省延辺地方）は、中国でありながら朝鮮人の数が圧倒的に多く、間島中学校にも日本人とともに朝鮮人も

在学していた。報告では、まず終戦前後の間島地方の日本人と日本人学校の状況を説明した上で、間島中学校の概況及び戦後の同窓会の発足と主要活動を紹介した。その後、同窓会活動の中でも訪中・訪韓活動に重心をおいて分析を行った。日中、日韓国交正常化という訪中・訪韓を可能とさせた国際的背景の下で、訪中では主に墓参りと慰霊活動が行われ、訪韓では、同窓会の韓国支部設立に伴う同窓会及び観光（朝鮮人同級生との絆）がメインとなった。

満洲国の学校であったにもかかわらず、戦後韓国で同窓会を開き、同級生に会いに韓国に行くという特殊なケースは、満洲の人脈が中国と韓国に引き継がれていることを端的に表した事例であると考えられる。また、間島から帰国した日本人が

満洲だけでなく、朝鮮半島の情勢にも関心を持つ傾向があったともいえる。間島中学校同窓会のこのような訪中・訪韓活動は、日本の植民地支配における満洲と朝鮮半島の関連性を表し、戦後の日本、中国、朝鮮半島の各関係を考察する上でも重要である。

報告2

瀬尾光平（東京大学大学院人文社会系研究科修士課程）『機関誌ノモンハン』の研究

本報告では、ノモンハン事件従軍者とその遺族が戦後組織したノモンハン会について、彼らが発行した一連の会報を中心に、その組織や語りの特徴を分析した。

先ず彼らが初期に発行していた『機関誌ノモンハン』（以下、『機関誌』と略す）の記事を通して、ノモンハン会の設立経緯とその組織構成の特徴を紹介した。さらに、その特徴が会報の語りをどのように規定していたのかについて考察した。

ノモンハン会の特徴として、第一にノモンハン事件の慰霊活動が遺族や従軍者によって戦前から各地で催されてきたこと、第二に該会がこうした各地の慰霊活動を統合していったことが挙げられる。報告では、『機関誌』所載の各地方会沿革や地方会独自の記念誌を通して、戦前に遺族や従軍者により各地で始められた慰

なお、本報告では、訪中・訪韓における日本人と朝鮮人の認識の差や韓国における満洲視点、日中・日韓関係の変化の中での同窓会の変遷などについて十分に考察を深められなかったため、今後さらなる分析を重ねていく中で明らかにしていきたいと考える。

霊団体が、戦後靖国神社での慰霊祭催行を主目的に全国組織として統合されていく経緯を明らかにした。会の活動は、遺族を慰霊祭の主体に据えつつも、従軍者、特にかつての師団司令部関係者を主体として組織運営がなされていた。

このような地域、部隊、階級、遺族と生存者等をまたぐ会の性格を反映し、『機関誌』上の語りも多元的な様相を呈した。ノモンハン会は、対外的にはノモンハン事件への解釈をめぐるマスメディアや学界におけるノモンハン像に抗議していたが、その一方で、対内的には『機関誌』上に遺族の欄、地方ノモンハン会の欄、部隊の欄が並存し、その多元的な語りの間には矛盾や対立も孕んでいた。本報告では、特に従軍経験者＝生存者が『機関誌』を通じて形成を試みたノモンハンのイメージと、遺族が求めるイメージとの摩擦が存在したことを示した。

最後に、上述の組織としての特異性がその語りにおいて内部摩擦を生じさせつ

つも、設立当初に疎外していた満洲国軍と捕虜の語りをも会内へと包摂していった可能性を指摘した。

今回の報告では事実を整理した段階に止まり、ノモンハン会の語りの特徴についてあまり踏み込んで論じることができなかったため、引き続き検討を進めてい

く必要性を感じた。会場からは、戦友会との比較の必要性や、分析視角について御指摘・御助言をいただいた。貴重な報告の機会を与えて下さったことについて御礼を申し上げたい。

おしらせ

資料提供のお願い

「満洲の記憶」研究会では、満洲に関する資料を収集しております。「寄贈資料目録」に示したように、これまでに書籍や会誌、写真、ハガキ、書簡など多数の資料を寄贈・貸与していただきました。これらの資料は満洲の記憶を継承する上で極めて貴重な資料であると考えております。

ご提供いただきました資料は本研究会が整理・管理し、学術研究において活用いたします。資料の公開方法は、資料目録を作成して本ニューズレターに掲載させるという形式を採ります。提供資料に含まれる個人情報等には深甚な配慮をい

たします。

また、お手持ちの資料には、貴重なもの、思い入れの強い品でお手元に置いておかれたいものなどもおありのことと思います。資料のご提供ではなくとも、本研究会の編集委員メンバーによって複写・撮影等をさせていただくという方法もございます。そのような希望がありましたら、ご相談いただければと存じます。ぜひ情報を本研究会までお寄せくださいますよう、ご協力お願いいたします。

カンパの御礼

「満洲の記憶」研究会では、皆様からカンパを募ることにしております。多くの方々より御厚意を賜りまして誠にありがとうございました。皆様方のあたたかい御支援に、あらためて心より御礼申し上げます。皆様からのカンパは研究会の活動が今後さらに発展できますよう、大切に使用させていただく所存でございます。

カンパをいただきました皆様の御厚意に対し感謝の意を込めて、ここに2015年度（2015年7月31日—2016年7月31日）に御支援いただいた皆様のお名前を掲載させていただきます。（50音順）

イシザキユウコ様 30口

梅沢正孝様 10口

カンパのお願い

「満洲の記憶」研究会では、継続して皆様からのカンパを募っております。本研究会は若手研究者・大学院生が中心となって運営しているため、これまで編集委員の寄付によって活動を続けてまいりました。

しかし、活動範囲が全国に拡がり、予想以上に多くの資料が集まったことにより、資料調査や整理・電子化などに使用する資金が慢性的に不足する状況となっております。そのため研究活動の資金使用のみに限定した口座を開設し、研究会の活動に御賛同いただける方から、御支援を賜りたく存じます。カンパは1口1,000円で、文末に記載している銀行口座へお振込いただけたら幸いです。

なお、御支援をいただいた方には、ニューズレター内にてお名前を掲載し、御支援いただいたことを皆様に紹介させて

いただく予定です（お名前の掲載を希望されない方は事前に御連絡ください。そのように対応いたします）。また、カンパして下さった方は、必ず本研究会宛にメールまたはお手紙で御連絡ください。

研究会としても誠実かつ積極的に活動をしてまいりますので、御支援のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

「満洲の記憶」研究会銀行口座
銀行：三井住友銀行
支店：国立支店（店番号：666）

種類：普通預金
口座番号：8088124
口座名：菅野智博（カンノ トモヒロ）

会員募集及び情報配信のおしらせ

本研究会は随時会員を募集しています。年会費は無料となっております。会員には、ニューズレター及びイベント情報の配信を行います。入会希望者は次の連絡先まで御連絡ください。

メールアドレス：manshu-kioku@live.jp
ブログ：<http://manshunokioku.blog.fc2.com/>
Facebook：「満洲の記憶」研究会
<https://www.facebook.com/groups/359559330877470/>

《满洲记忆》（“满洲记忆”研究会通讯）第4期

中文目录

- 追忆——满洲素描—— 執筆：西田纯明 編集：尹国花
- 在战后延吉的生活——从败战到归国—— 執筆：猪伏昌三 編集：佐藤量
- 一位军妇的遣返体验 執筆：山村幸 整理：山田千里
解題・編集：大野绚也、佐藤仁史
- 『间岛中学校同窗会报』记事目录 尹国花
- 延边朝鲜族自治州调查记——以延吉与龙井为中心—— 佐藤量、汤川真树江
菅野智博、尹国花
- 2016年度“满洲记忆”研究会秋季大会报告要旨
- 寄赠资料目录
- 2016年度研究会活动记录
- 会务启事

Memories of Manchuria (Newsletter of the Society for “Memories of Manchuria”) No. 4

Contents

Recollection: a sketch of Manchuria NISHIDA Sumiaki, Ed. YIN Guohua
Post-war life at Yanji, from the End of War to Repatriation
..... IBUSE Shozo, Ed. SATO Ryo
Memoir of a military spouse Repatriation YAMAMURA SACHI,
collated by YAMADA Chisato,
bibliography by SATO Yoshifumi and OHONO Junya
Index of the Bulletins of the Jiandao High School Alumni Association
..... YIN Guohua
Field Report on Yanbian Korean Autonomous Prefecture, Focusing on Yanji and
Longjing
..... YIN Guohua, KANNO Tomohiro, SATO Ryo and YUKAWA Makie
Summary Report of the Autumn 2016 Meeting
2016 List of Donated Materials
2016 Chronology of the Society for "Memories of Manchuria" Activities
Notice

編集後記

第4号をお送りします。本号では引揚げに関する体験談3編、本誌の特徴ともいえる会報記事目録1編、そして調査記1編を掲載しました。本会ではみなさまから提供された様々な資料を同時並行で整理しております。本号ではそのうち旧間島、現在の延辺朝鮮族自治州に関する記事が多いことが特徴です。よく知られているように、当該地域は朝鮮人移民が人口の大多数を占めた地域であり、「満洲国」期や引揚げ時の民族関係の実態について理解する上で、枢要の位置にある地域です。本誌に掲載した体験談も日本人側からなされたものではありませんが、これらを読解するには本地域の性格を十分に把握することは欠かせません。この点において、本号の各記事では朝鮮人のルーツをもつ中国からの留学生尹国花さんが活躍していることには大きな意義のあることといえます。

本会の活動について、支配者側の記憶の収集にどれほどの意味があるのかといった疑念が呈されたことがあります。本会は支配者側の記憶を単に集積するという意図は毛頭ありません。『二〇世紀満洲歴史事典』において「満洲の記憶（日本人）」を執筆した猪股祐介が明晰に指摘するように、様々な記憶の収集・分析に際しては、現地住民への加害と日本人内部の加害という二つの加害体験の存在を常に意識することが欠かせません。かような緊張感の中で様々な対話が進むことを切に願っています。（佐藤仁史）

『満洲の記憶』 第4号

発行日：2017年10月31日

編集：「満洲の記憶」研究会編集委員会

編集委員：

飯倉江里衣 尹国花

大野絢也 菅野智博

佐藤仁史 佐藤量

新谷千布美 施昱丞

瀬尾光平 森 巧

湯川真樹江 林志宏

発行：「満洲の記憶」研究会

〒186-8601 東京都国立市中2-1

一橋大学大学院社会学研究科

佐藤仁史研究室 気付

Tel・Fax：042-580-8885

◇本誌は年刊オンラインジャーナルで、毎年9月に刊行されます。本会学年暦は、毎年8月1日から次年7月31日です。

◇本誌は一橋大学機関リポジトリにおいて配付しています。

[http://hermes-ir.lib.hit-](http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/27095)

[u.ac.jp/rs/handle/10086/27095](http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/27095)

◇「満洲の記憶」研究会連絡先

・メール：manshu-kioku@live.jp

・<http://manshunokioku.blog.fc2.com/>

(研究会ブログ)

ISSN 2189-390X